



目 次

祖書五大部の綜合觀(其四完了).....	本多日生
佛子の自覺.....	本多日生
天風三萬里紀行(其三).....	小林日種
記 事.....	.....
○ホノル、の野口上人、	○各地教報

第三十四年九月號

第三十四年九月一日發行 第四百十號

# 祖書五大部の綜合觀 (其四)

大僧正 本 多 日 生

## 立正安國論を中心としたる考察

次に立正安國論の要旨に就てやはり五大部が相關共通して行くものであると思ふ、安國論に於ては、國亡び人滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈つて須く佛法を立つべし。

(三三四頁)

といふことがあるが、これは安國論に於ての大事な點である。無論法は大事にしなければならぬ、國は法に依つて昌へるといふことは無論であるけれども、安國論の論旨の歸着する所といふものは、國が滅びてしまへば佛の教も共に亡びてしまふものである、だから國の隆昌を祈つて佛法もその中に發達をしなければならぬといふ、愛國の精神を高調力説

して居る所に安國論の大事な所があるのである。それは安國論の文章の中に於て見れば頗る明瞭である。又個人と國家の關係も、

(三九〇頁)

汝一身の安堵を思はば先づ四表の靜謐を禱るべきものか。

と書かれて、自分の安泰を祈るに就ても國家が亂れ、國家が衰へては、個人の安泰といふものは望めないのであるから、どうしても「先づ四表の靜謐を禱るべきものか」で、國の安泰を圖らなければならぬ、これもわかり易い事ナンである。ちようど船に乗つて居る人間みたやうなものである。自分ばかり牡丹餅を食つて良い心持で寝て居つたところが、船が衝突して顛覆へるといふことになれば、びつくりした時分には水の中に陥つてしまふ。だから一身の安堵

を思はゞ先づ四表の誦誦を齎るべきかといふことは  
わかり易い事である。わかり易い事であるけれども  
なか／＼そこが難かしい、今日の日本の國民でもそ  
のわかり易い事がなか／＼わからない、それだけが  
わかつて呉れたら日本といふものはズツと樂になる  
のだけれども……。そこらに店を出して居る者にし  
ても、算盤を弾いて五十錢儲かつた、三十錢儲かつ  
たといふことは考へて居るけれども、國家の盛衰と  
いふことに就ては非常に考が鈍い、日本人は愛國心  
に富む國民だと言はれたけれども、それが非常に  
疑しいものになつて來て居る。この度の御即位式に  
際しては教化が大事だといふことを、陛下が宣言せ  
られた一朕内へ即ち教化ヲ醇厚ニシ、愈民心ノ和會  
ヲ致シ、益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ」と言は  
れた、陛下の御軫念なされて居ることは非常に明  
瞭なことであるから、この際には上下心を一にして  
教化の醇厚といふことに向つて突進しなければなら

はなからうかといふ人が佛教に集つて來る。だから  
お札みたやうなもの三十錢くらゐで買つて歸つ  
て、それで三百圓も儲かるやうに……。といふので、  
お賽錢などは大体狭い方から來て居る。二錢くらゐ  
抛り込んで一萬圓にもなるやうに心得てやつて居  
る、さういふ極めて低級なるものが佛教に集つて來  
るやうになつては、これは實に慨はしい事である。  
だから日蓮聖人の正しい教は、今の日本人のやうに  
低級な觀念であつたならばどうしても弘まらな  
いのが當然である、モウ少し國民の思想が高まつて來な  
ければならぬ。宗教を信するが爲に、例へば或る種  
の宗教はこれを信するが爲に國民精神が壊れて來  
る、一つの例を引けば朝鮮にある天道教といふやう  
な宗教は、神様を信すると共に日本の國を亡すやう  
なことを願つて居るものである。そこ迄行かなくて  
も、その或る種の宗教が弘まることに依つて國家が  
危くなつて來るといふことを考へた時には、日蓮主

ぬけれども、その氣組といふものは出て來ない、ボ  
ンヤリして居る。斯ういふ工合に即位のやうな大禮  
の場合に勅語を以て發表せられたならば、少しは國  
民に響かなければならぬのに、さう行かないといふ  
のは、國民に愛國心が衰へて居るからであらうと思  
ふ。

日蓮聖人のこの御教訓は、宗教の信仰を教へると  
共に愛國心を發揚せられたといふことは非常に大き  
な問題である、兎角宗教を設けばどうしても國家社  
會といふやうな事から遠かるやうな感じがある、殊  
に佛教はさうであつた、佛教といふものは世捨人み  
たやうに、厭世教であるとか、獨善主義であるとか、  
個人主義であるとか、獨善主義であるとかいふ風で  
あつた。今でも佛教に來る人は實社會からは縁の遠  
い人で、世を憂へ國を思ふといふ人は集つて來ない  
で、何か信心したらそこらにうまい事はなからうか、  
商賈は餘り骨を折らないでも錢が儲かるやうなこと

義のやうな信仰と同時に國を守護して行くものとは  
非常な相違が起る譯である。今でも議會に於て信教  
の自由といふことの一點張で喧嘩をして居るけれど  
も、自由といふことも程度の問題である、表面何も  
害の無いやうな顔をして、宗教の法衣を着てさうし  
て随分國を禍ひするといふことも起り易い事であ  
る。物には裏と表があるから、表から言へば宗教の  
信心はやさしい事で善いことだと思つてやつて居る  
間に、この頃檢舉された天理研究會のやうなことも  
ある。その一つを擧げて直ぐわかる、あゝいふも  
のは宗教の名に依つて朝廷の威徳を傷けるやうなこ  
とを宣傳して居つた。それでも世の中には馬鹿が多  
いから、それに賛成して五萬人も仲間が出来て居つ  
たといふ、餘り騒いでも仕方がないからいゝ加減に  
扱はれて居るけれども、本當の日本の法律に當嵌め  
れば皆頭を斬つてしまはなければならぬ、朝憲紊亂  
の罪であるかも知れぬ、さういふ深い考無しにさう

いふ事をやつて居る、法律に觸れることも知らない  
 のである。京都あたりでやつたのを見ると、片岡直  
 温民の處に行つてさういふ朝憲紊亂のやうな事を言  
 ひ居つた、片岡氏はあゝいふ人であるから、「さうい  
 ふ事を實行しようと思へばどうしても政權を持つて  
 居るものでなければいかぬ、俺は今大臣でない、京  
 都では先づ知事であるが、知事は忙しいから警察部  
 長が宜からう、警察部長の所に行つて話をしたなら  
 ば届くものは届くだらう、」さうでございませうか  
 といふので警察部長の所へ持つて行つたので早速捕  
 まつてしまつた。自分の言ひ居ることが刑罰に觸れ  
 るのであるけれどもそれを知らない、片岡氏が面倒  
 くさいから警察部長の所に送り届けた、自から出か  
 けて行つて捕まるほどの暗愚なものである。それが  
 先づ親方ぐらゐの輩であるから、その後にくつ附い  
 て居る者は何にも知らない、實に世の中には不明の  
 人が澤山居る譯である。そんな信心と絡んで世を毒

し國を危くするやうなものがある方から考へると、  
 日蓮聖人が立正安國の思想を以て信仰と共に國家の  
 興隆を圖られたといふことは非常に大切な事であ  
 る。

西洋の歴史を見ても、羅馬といふ國が榮えて居つ  
 たのをこれを潰したのは何であるか、基督教といふ  
 宗教が潰したのである。さうして羅馬法王といふも  
 のが横取したのである、又今世界を禍ひして居ると  
 ころの共產主義でも、その奥には猶太教の思想がモ  
 ウ一つ根本だといふことが随分論ぜられて居るが、  
 或はさうかと思はれる。さうすると世界を惑亂して  
 居るところのこの勞働運動とか革命とか騒いで居る  
 事の奥にも、やはり一つの宗教、猶太教の亡魂が禍  
 ひして居る譯である。なか／＼宗教といふものは一  
 方から言へば恐ろしいものである。穩かなやうな顔を  
 して民心にズツと喰込んで行つてそれが害を爲すと  
 いふことになつたら、この位恐るべきものはない。

そこを愛國の精神から日蓮聖人が睨んで「法は國を  
 鑑みて弘むべし」と言つて、その法の名に隠れて惡  
 い事をする奴を叩出して、さうしてこれを折伏せら  
 れたといふことは、今までは日蓮聖人を強過ざると  
 か宗教家らしくないとか言つたけれども、今日以後  
 に於ては日本の國家はこの日蓮聖人の筆法に依つて  
 救はれるものである。今に政治家などもこれを覺る  
 の日が来るのである。

さういふ大切な事が安國論に出て居るのである  
 が、これはたゞ日蓮聖人の考から出たのではない、  
 やはりお經から起つて來るのであつて、法華經の中  
 には『治世語言皆順正法』と言つて世の中を治める  
 語言、又『俗間經書』と言つて世の中の道德、それ  
 が皆正法と一致するといふことを説いてあるのであ  
 る。その事を詳しく述べたものは同じ法華部に屬す  
 るところの大薩遮經といふお經に、その點が論ぜら  
 れて居るのである。法華經は綱領だけであるから細

かい事は省いてあるのだけれども、法華部に攝屬し  
 て居るところの大薩遮經には王論品といふものがあ  
 つて、詳しく國家と法華經との關係が述べられて居  
 る。その中にいろ／＼説いてあるけれども、殊に大  
 事な點は轉輪聖王の心得が説かれて居るのである。  
 その轉輪聖王の心得の一番大事なる所は、即ち「護法  
 の法王」と言つて、佛法のやうな所謂教化を生命とし  
 て國を治めて行く王様である、護法の低い所を言へ  
 ば所謂道德問題である、十善の法を修して行く所か  
 らが護法であるから、殺生をせぬとか、嘘を吐かぬ  
 といふことから、往いては深いところの法華經の信  
 仰まで、さういふ尊き道德宗教のやうな正しき意味  
 合を生命として、教化を生命として國家を統治して  
 行くのである。それであるから一方教の方から言へ  
 ば、さういふ轉輪聖王の統治を翼賛して行くといふ  
 ことになるのである、これが兩方からピッタリ合ふ  
 やうになつて居る、法國冥合といふことは、王様の

方から言へば正法を愛護し、正法の方から言へば即ち國家を愛護して行くのであつて、互に思ひ思はれつゝ、兩方が協力することになつて居るのである。その事が大菩薩經の王論品の中に極めて能く説かれて居るのである、即ち一言にして言へば「道を以て國を治め、諸々の衆生を護るべし」と説かれて居る、それが王様の心得である。この道を以て國を治めるといふことが「立正安國」になる、以道治國は他の語を以て言へば立正安國である。日蓮聖人の立正安國論の如きは無論この大精神から現れて來たものであつて、何も佛敎に無い思想を持つて來て、佛敎が非國家的のものであり、厭世的のものであるのを、日蓮聖人が物好きに國家觀念を加へたといふものではない。

この安國論に現れて居る思想が他の御書に於てどうなつて居るかと言へば、開目鈔は最も明瞭に、我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目となら

む、我れ日本の大船とならむ等と、ちかかし願やぶるべからず。(編一六頁)

と申して、日蓮聖人の大誓願が日本の柱を以て任じて行かれるので、この點は、立正安國論と全然同じ意味合である。

本尊鈔はどうかと言へばこれ亦法國冥合の意味が明かに出て居るので、それは本化上行菩薩が或る時は王様となり、或る時は僧侶となりして出て來る、その本の樂屋は一つだといふことが言はれて居る。

當に知るべし此の四菩薩、折伏を現する時は賢王と成りて愚王を誡責し、攝受を行する時は僧と成りて正法を弘持す。(編九四八頁)

王様となり僧侶となりして行くが、本當の折伏といふものは王様となつて正法を擁護する場合であるといふことが言つてある。その思想が消化れて現れて來たのが、天晴ぬれば地明かなり法華を誦る者は世法を得

べきか。(編九四九頁)

といふ語で、この世法といふことは日本の國の興隆を意味して居るのである、法華を誦るといふ者は日本の國家の隆運を圖らなければならぬ、又その事に就て國家を隆盛にする方法を知つて居るといふことが、「法華を誦る者は世法を得べきか」といふことである。この世法といふことは普通たゞポンヤリ考へて居るのであるけれども、本當は即ち國家經論の大事も法華經の思想といふものが伸びて行くといふことを言つたものである。家庭で言へば信心と商賣、夫婦の間で言へば信心と夫婦相和といふことになつて來るけれども、今廣く日蓮聖人の言ふ場合に、世法といふことは即ち國家の經營である、如説修行鈔にあるところの「吹く風枝をならさず、雨壞を碎かず」といふことであり、安國論にあるところの「佛國何ぞ衰へんや」といふことであつて、國家の興隆を意味して居るのである。夫婦仲好くといふ

ことも非常な大切な事であるから、そこから物は考へて行かなければならぬ。そこで「女房と酒うちのんで南無妙法蓮華經」といふことがある、夫婦仲好うして行くその世間生活の中に信仰を織込むが如くに、擴げて言へば國家の統治の中にこの法華經の精神が入つて行かなければならぬ。

平く言へば聖德太子の爲されたやうな意味合が大である、如何に文明が變化して行つても、今日の如くにあらゆる機械の文明が進歩して行つても、根本には聖德太子のお考へになつたやうな精神文明を重んじなければならぬ。或は印度の阿輪迦王がやつたやうなあゝいふ信仰道徳を重んじなければならぬ、明治天皇の御趣意も確にさうだと思ふ、今日はその明治天皇の道徳を重んじ給うた方面が幾らか薄いで、さうして機械的文明を開發せられた所謂物質文明の進歩の方が高まり過ぎるので、そこに調節を誤つたと思ふ、兩方並び進まなければならぬ。明治

天皇の仰せられた事は、兩方とも揃つて行つて居るけれども、政治家及國民が物質文明の方へ偏つて、精神文明を軽んじた事になつて居ると思ふ。それからいふ一つ残念であつたのは、明治天皇は不世出の英主で在らせられたけれども、左右の者の行届かぬ爲に、佛教に就てのお考を決定せられるに至らなかつた、願くば、今上天皇に於て、この佛教と國民の事柄、佛教と文化の關係に於ける大事を御決定を願ひたいと思ふのである。これに就ては不思議な縁があると思ふのは、立正大師の謚號は、今上陛下が攝政殿下で在らせられた政治の最初にこの大師號を賜つたのである。又御即位の大禮に教化醇厚の勅語を御發しになつたのであるが、旁々以て今上天皇の御代に於て、この大切の事がだん／＼明かになつて行くのではないかと思ふ。いろ／＼それには不思議な縁も揃つて望みあり氣に思はれるので、甚だ尊いことに考へて居る次第である。

余に三度の高名あり、一つには去る文應元年七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿谷の入道に向て云く、禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ、此の事を御用ひなきならば此の一門より事をこりて佗國にせめられさせ給ふべし、二には去る文永八年九月十二日申の時に平の左衛門尉に向て云く、日蓮は日本國の棟梁也、予を失ふは日本國の柱を倒すなり……第三には去年四月八日左衛門尉に語つて云く……經文には何時とはみへ候はねども、天の御氣色いかりすくなからず急に見へて候、よも今年はすこし候はじと語りたりき。

(一四二頁)

撰時鈔には國に關する事は割合に澤山言はれてある、

法華經を失ふ大禪の僧どもを用ひらるれば國定めてほろびなん、亡國のかなしき亡身のかなしきに身命をすて、此事をあらわすべし。

(一三三頁)

法華經を失ふやうな者をお用ひになれば國が亡びてしまふ、何も日蓮は單に法華經の爲に心配して居るのではない、日本の國から法華經を捨て去る時は日本の國の礎が明かにならない。表面の礎は國體であり、皇室であるけれども、モウ一つ深い、モウ一つ隠れたる礎は、法華經の教義に依つて國民の信念を築き上げないと思ふの禍ひが起つて來る、であるから法華經を失ふやうな者をお用ひになつては國は危いと言はれる、これはやはり立正安國の精神を書かれて居る譯である。それから撰時鈔の有名人三度の高名云々の文もやはり安國論の精神である。

て始終論じて居られるのであるから、寧ろ安國論の精神を詳しく引延して述べられたやうな御書である。

報恩鈔にもやはり國の事は一番最初にも出て居るので、

佛教をならはん者父母師匠國の恩をわするべしや。

(一四五頁)

とお書きになつて、いきなり國の事が出て居る。又

(一四八頁)

法王といふ釋迦牟尼の法を侮辱するやうな事をしたのでは、人王即ち國家も安穩には行かないといふことを仰せられて居る。又

日蓮は日本國の柱なり、日蓮を失ふほとならば日本國の柱を倒すになりぬ。

(一四八頁)

と言はれて、蒙古來の事に關していろ／＼仰せられて居る、これは皆立正安國の思想と同じ事である。

それから

父母の恩、師匠の恩、三寶の恩、國の恩を報ぜんがために身をやぶり命をすつれども、破れざればさてこそ候へ、又賢人の習ひ三度國をいさむるに用ひずば山林にまじわれといふことは定まる例なり。

(一四九九頁)

此處にやはり國の恩を報ぜんが爲に自分は法難に遭うたといふことを仰せられて居る。殊にこの法難と言つても日蓮聖人の御法難は特別にえらいので、佐渡ヶ島の事でもたい雪が降つて寒いといふだけではない、いろ／＼反對者があつて殺しに行つた者がたび／＼ある、その事は撰時鈔の中に、

今日切るあす切るといひしほどに四箇年というに。

(一四九九頁)

と書かれて居る。『今日切るあす切る』といふのは、今日は殺す、明日は殺すといふ噂が立つて居つた、たゞ阿偏坊が一遍殺しに行つたくらるることではな

い、又殺さうといふやうな奴が出て来る、一旦諦めてその人間は行つてしまつても、又違つた奴が出て来て殺さうとするのであるから危険な事はこの上もなかつた。その他撰時鈔ばかりではない、或る御書には夜半に風がヒューツと吹いて來ても、眼を醒まして、又やつて來たのではないかと思ふ、或は顯佛未來記にも『今年今月萬が一も身命を脱れ難さか』とあつて、だん／＼様子がおかしくなつて來たからモウこの月の内は逆も生き永へることは出來ないだらう、だから法門の事は弟子にこれを問へといふ文章を書いて居られる。この次は佐渡に手紙を寄しても返事を出せないかも知れないといふ位に迫つて居る、なか／＼その御法難といふものはえらい事であつたのである。又

我國他國にせめらるゝ事出來すべし、此事日本國の中に但日蓮一人計りしれり、言ひいだすならば般の村王の比干が胸をささしがごとく、夏

の榮王の龍蓬が頭を切しがごとく、檀彌羅王の師子尊者が頸を削しがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法道三藏のかなやきを焼かれしがごとく、ならんすらんとはかねて知りしかども、法華經には我身命を愛せず但無上道を惜しむと説かれ、涅槃經には寧ろ身命を喪ふとも教をば匿さざれといさめ給えり。今度命をおしむならばいつの世にか佛になるべき、又何なる世にか父母師匠をもすくひ奉るべきと、ひとへにをもひ切りて申し始しかば、案にたがはず或は所をおひ、或はの／＼しり或はうたれ、或は疵をかうふるほどに云々。

(一四九七頁)

と書かれた、これは國を救はんとして、この事を言出せば斯ういふ法難が起るけれども、言はなければならぬといふことである。『日本國の中に但日蓮一人計りしれり』といふのは、日本の國を蒙古が攻めて來る、國家危し、たい信心すると言つても、國が亡

びてしまつては駄目ぢや、今のやうに國を忘れて、消極的にナンマイダー／＼とやつて居るやうな宗教ではこの國は危いぞと言はれたのである。さうして又日蓮聖人に對しては如何なる者でも惡口を言ふやうな事になつたので、その點も報恩鈔に書かれて居る、

富樓那のごとくなる智者も、日蓮に値ひぬれば惡口をばく、正直にして魏徵忠仁公のごとくなる賢者等も日蓮を見ては理をまげて非とをこなふ、況や世間の常の人々は犬の猿をみたるがごとく、獵師が鹿をこめたるにたり。

(一四九八頁)

實に日蓮聖人に對する當時の世間の態度の狀態が明瞭にわかれると思ふ。富樓那尊者は辯論の人で、而も人に言ひ負かされるやうな事のない人だけれども、さういふ人でも日蓮に出會へば惡口を言ふ、即ち言ひ負かされるから惡口を言ふのである、これは面白

い文句である、富樫那のやうな能辯の者でも日蓮に會つては悪口を吐く、魏徴忠仁公といふのはこれは唐の太宗の時のえらい人達の中のえらい人である、唐の太宗は貞觀政要を作る時分に、房玄齡といふやうな多くのえらい人を寄せた、それはなか／＼學者でもあり、議論家でもあり、正直にして少しも間違つた事などを言はぬといふ人々であるが、その中でも特にえらい魏徴忠仁公のやうな人でも、日蓮を見ては理をまげて非を行ふ。これは何を言つて居られるかと言へば、日蓮聖人の正義に出會つては賢い人間もさういふ間違つたことになる。普通世間の人間は、まるで犬が猿を見たやうに悪口を言ふ、それは日蓮聖人の議論が卓越して居るのである、あらゆる歴史を見ても偉い人は皆譏られたり、苦しめられたりするのである。これは何故かといふと、その當時の人よりは意見が進んで居るが爲にさういふ事が出来るのである。ちようど御維新の時分に吉田松陰先

生が小塚原で磔になつた、今から考へれば實に忠義のえらい人であつたが、思想の進まぬ者が進歩したえらい人を皆嫌うた結果あゝいふことになつたのである。日蓮聖人の思想も當時に了解されなかつたばかりではない、今尚ほ日本の國家はまだ日蓮聖人のこの思想を十分に味ひ得ない。併しモウ程なくこれは了解される日が来るだらうと思ふ。その點では一方に彼の共產主義とか左傾主義のやうなものが起つて騒いで居ることは、反面からこの大思想を了解すべき機運を造る唯一の力である。あんなものでも無ければまだ／＼百年経つてもわからぬかも知れぬけれども、彼等がなか／＼兇暴なもので容易にその運動を止めない、グン／＼と押寄せて國が禍ひせられるに至れば、覺らざらんと欲するも得ずで、遂に法華經なり日蓮聖人の正義に近寄つて来る機會を得るであらうと思ふ。その點から言へば「大なる禍は大なる福にて候」と日蓮聖人の言はれる意味がわか

ると思ふのである。

撰時鈔を中心としたる考察

それから撰時鈔であるが、これは多くを言ふまでもなく時の問題は一方から言へば應用に屬することである、撰時鈔の最初に、

時鳥は春ををくり鶏は曉をまつ、畜生すら尚ほかくのごとし、何に況や佛法を修行せんに時を糾さるべしや。

(一八九頁)

と書かれて、時鳥の啼く時、鶏の鳴く時、チャント時といふものがある、佛法を修行する者が時を知らないやうなことで仕方がない。鶏が暮れ早々に鳴けば何か凶事ではないかど人が騒ぐやうなものである、時を以て鳴けば、鶏が夜明けに鳴くのは洵に氣持が快い。あんな畜類でも時を知つて居るのであるから、佛教を弘める者が時を知らぬといふことはない。而してこの時といふ問題はなか／＼大事な事では

ある。春なら春櫻花が咲いて來るといふことでも、この時候の運轉して來るのは不思議なもので、寒中非常に寒いやうに見えても、又その裏に温味が入つて來て居るのであるから、夜となく晝となくあらゆる草木は春の芽ざし行く準備をして居るに違ひない。遅れると言つても僅に二日か三日で、やはり上野の山に櫻花が咲く時期が來れば咲出すやうに、その時といふものはわからぬやうに見えて實はなか／＼確かりしたものである。涅槃經あたりに依つて考へると、一切の問題は時だといふことになる。吾々に佛性があるといふのも、これは顯はれずには置かない、必ず何時かは顯れる、たゞ時の問題である、佛と衆生の違ふのも時の問題、十五夜の月と晦日の月の違ふのも時の問題、悪人と善人の違ふのも時の問題、赤ん坊と嫁の違ふのも時の問題ナンである、禿頭の爺と綺麗な若い息子の違ふのも時の問題である。皆時といふものがこれを變轉せしめて行く、或



る意味から言ふと非常に不思議なものである、一切は皆平等なものであるけれども、時の關係に於てのみそこにたゞ相違がある、赤ん坊も爺も同じものだけれども、時に依つてそこに相違の有様を現出して居るのである。それであるから時が大事である、その時といふものに適合するやうに一切の運用をして行かなければならない。

殊に人生は生きた者が寄つて居る所であるから、草や木とは違つてその時の運行といふものはなか／＼大きなものであるから、その人心の傾向する所を察知して教を運用して行かなければならぬ。故に佛教の方に於ては四悉檀の運用と申して、ちやんとその運用を誤らぬやうに、根本の第一義といふ動かないもの、萬世不易のものと、時に依つて變轉して行く側とを心得て行かなければならぬことになつて居る。日蓮聖人の教もその事を能く看別けて運用せられて居る譯である。今日は何として考へても時勢

の一大轉換に向つて居る譯であるから、この法華經の運用なり、日蓮主義の發展策に就ても大に考慮しなければならぬ。

この思想は撰時鈔ばかりではない、何書にもある。一々擧げなくとも、本尊鈔にしても表題からして『如來滅後五百歲始觀心本尊鈔』とあつて、五百歲の始めといふ、時のことから論じてある位である。開目鈔にもやはり時のことは『末法の時なるが故に』といふことが論じてある、それは到る處に、天台傳教の御時は早や過ぎたり、今末法に入りぬれば日蓮の時が一轉期である、元と斯うであつたからと言つて、その傳統的の事を以て抑へることは出来ない、日蓮の時は切替時である、新しき末法の時であるといふことを以て總てを解釋せられて居るのである。現代は末法といふ時代は變らぬけれども、併し東西文明の接觸に依つて世界的思想の大接戰期に向つて居る今日、佛教はさういふ立場に立つか、法華經は

どういふ態度に出るかといふことは、餘程大きな問題である。實は人物があれば互に寄つてその點は考究しなければならぬことである、一步を誤れば精神の文化全体を破壊し去つてしまはんとして居るものである。露西亞の如きは宗教を絶滅して居る、又最近の新聞にも支那の事が出て居つたが、憑玉祥が宗教を絶滅してしまつたとある、彼の勢力の及ぶ所寺院は悉く奪ひ取つて無産者の手に渡してしまひ、坊主は悉く還俗をさしてしまつた。ところが餘り激しい改革であるといふので、それに反對して騒いだところの僧侶その他の思想家を、一萬人ばかり撃殺したといふことが出て居つた。憑玉祥がやつてさうであるが、これが若し南方政府あたりがやるといふことになる、五萬人や十万人では追つかない、何百万人でも皆殺してしまふといふことをやるのである。そこには寺もなくなり、佛像は皆泥土に投込んでしまふ、憑玉祥がそれだけの範圍に勢力があ

るか知らぬけれども、あれが東三省にでも出て來たら、又同じやうに寺は勞働者に與へてしまひ、佛像は皆泥土の中に抛込み、坊主は皆ふち斬つてしまふといふやうな事をやるであらう。なか／＼えらい事になつて行き居る、それはつい隣邦でやつて居る。どうも日本の坊さんも眼が醒めな過ぎると思ふ、今日は餘程根本から考へなければならぬ。これは坊さんばかりではない、さういふ時が來たら坊主だけが叩出されて困つて居ると思ふけれども、さうではない、自分の家の佛壇に信仰することも嚴禁されてしまふのである、坊主ばかりではない、宗教信すべからずといふ法令を出して、信心をしたら牢に打込むといふことになつて行くから、一遍に佛壇を棄てしまふはなければならぬ。近頃の改革といふことはその點に於ては如何にも兇暴なものである、一擧にして宗教を屠らんとして居るやうな時である。我國に於てはさういふ事も容易に起りもすまいけれど

も、若し世界的に動搖を來せばやはり影響される譯である、日本に於ても彼等の運動の中には第一に宗教を呪うて居る。土地の事などに就ても、皇室の御料地と寺の境内及び寺の所屬地を一舉に奪へといふことが、彼等の運動綱領として露西亞から寄したものの、中に書いてある。全く今の思想運動といふものは恐しい事をやつて居るのである。

このやうな時を理解しなければならぬ、決して今日は平凡な時期でない、佛法を修行せん者は時を糾さざるべしや、時鳥は春をくり鶏は曉をまつ、鳥でさへも時を知つて居るのに、佛教を宣傳する者が時を知らぬでは相濟まぬといふことを、この大きな時代の變轉期に對しては考へなければならぬ。又在家者もさうである、今までのやうにボカンとしてくだらない信仰をその儘に持つて今後に行くといふやうなことは間違つた事である、これは皆國民の暗愚な爲である、宗教のことも信仰のことも、こ

れは一大刷新を穩健なる方法の下に加へなければならぬ。彼等のやるが如く寺を奪ひ、坊主を泥溝に抛込むといふやうなことは兇暴なる破壊運動である。さればと言つて今までのやうに眠つて居るか起きて居るかかわからぬやうな信仰状態をこの儘にして置くといふことは、これ亦餘りに固陋である。これは實に右と左の大きな間違ひである。むやみに泥溝に抛込むのも、此の儘欠伸をさして置くのも、共に時代を知らない馬鹿者である。その間に本當に覺醒して正しい意味に於て活躍する宗教を要求するといふのが、教の爲にも人の爲にも國の爲にも當然なることと思ふのである。

どうか一日も早くさういふ域に達するやうに、吾等の運動はその魁を成して、何等かの御用を勤めたい、それが今日の場合に於ける時を知る法師なりと考へる次第ある。

(完結)

# 佛子の自覺

大僧正 本 多 日 生

## 一、自覺の力

自覺といふ語は近來盛に用ひられて居るが洵に好い言葉で、今まで眠つて居つた者が目を覺ます、酔うて居つた人が醒を覺ます、さうして其の覺めた心が強い感激を以て、其の中から今までの間違つて居つた者、或は行ひを直して立派な人になつて行く力を指して自覺といふので、唯一と通り的心得とか了解したとかいふ事とは違ふのである、即ち自覺とは人格を改造する力を持つて居る場合に使ふ語であると思ふ。それ故に大切な事に就ての自覺といふものは洵に結構な事であるが、今は吾々人間は佛子であるといふことの自覺を徹底しなければならぬといふことを御話して見やうと思ふのである。

自覺の實例としては歴史上に數多い事であるが其の一二を語れば、孔子が川の流を見て深く悟る所があつて「逝ク者ハ斯ノ如キカ晝夜ヲ舍カズ」川の流の流れば夜も晝も何時も休まずして流れて居る、其のやうに吾々人間が修養を心掛けて行く上には、途中に於て其の心が碎けるやうな事があつてはいけない、又怠慢があつてはいけない、川の水の晝夜を別たす流れて居るやうに、間斷なき反省努力を加へて始めて人格は良くなるのである、といふことを深く自覺せられた。それが孔子のやうな立派な人格者の出来る動機を成したものだと言はれて居るのである。孔子自身は、自分クライの者は家數十軒グライの小さな邑にでも一人や二人は生れて居るのである

けれども、併し永い支那の歴史に孔子程の者が二人と出来ないのは、其の自覺の足らざるの致す所であるといふことを申して居るのである。

又釋尊の傳記を見ても、釋尊は四門出遊と言つて散歩に出られた場合に、病める人を見、老ひたる人を見、死せる人を見て、それに就て人生といふものは生老病死の状態が洵に深刻なものである、是はウツカリして居れない、又一般の政治や經濟や社會の問題で騒いで居ることに依つて、此の人生苦の生老病死愛別離等の苦といふものは除去することは出来ない、どのやうな政治經濟の方策を講じて、親子の別れ、夫婦の別れ等の人生に於ける愛別離の苦といふものは深刻であつて之を除くことは出来ない、それが爲に却つて純良なる人間は精神がフラついてしまふのである、自暴自棄の者は酒でも飲んで胡麻化すことが出来るけれども、却つて立派な人がさういふ場合に精神を亂さなければならぬ状態に置かれて

居るのである。自らも之に對して精神の安定を圖らなければならぬが、又多くの人達が同じ苦しみを持つて居る、如何にして之を救ふべきかといふことに對して、此の人生の有爲轉變の状態に就ての深き自覺を持たれたといふことが、釋尊の出家成道の動機をなして居るといふのである。

人は川の水は誰も見ても居る、併し孔子のやうな深い感激は容易に持たない、又人は皆人生の變遷を日夜に見て居るけれども、唯悲しむのみにして一時は驚くけれども日が経てばまたボンヤリしてしまふといふ譯で、釋尊のやうな本當の自覺を持たないのである。其の自覺の徹底した所に於て孔子が出來、釋尊が出來たと考へて見ると、自覺の力の尊いといふことが能く分るのである。

又龍樹菩薩の傳記の中にも、龍樹の青年時代は洵に亂暴な粗惡の性格であつたけれども、或る事柄に觸れて非常な自覺をもつて、一變して八宗の高僧亦大きいものであつて、左様に自覺といふものが人格を改造する力は強大なものである。

それに歴史に有名な偉い人でなくとも、東京の松屋呉服店の先祖の事を考へると、彼は一個の平凡な青年であつた、農村の飢饉に出會つて非常に困つた際に、或る日のこと雪隠に入つて居つた、すると雀が雪隠の中にやつて來て糞スベを銜へて行くのを見て非常に感激して、アンナ雀でさへも飢饉の世の中に尚ほ自ら餌を求めて自活して居る、人間が如何に飢饉だからと言つて、首を吊らうか舌を喰切らうかなどと考へて居るのは如何にも腑甲斐ない事であるといふ自覺を起して、雪隠の中で雀の爲に教へられて彼は發奮して、遂に彼の大商店を開く基を作つたのである。

と謂はれるやうな、釋尊に亞ぐ偉い人になつて、第二の釋迦といふ名前を與へられた。或る場合には龍樹と釋迦と何れが勝るかといふことさへも問題にせられたクライに偉い人になつたのであるが、其の青年時代は丁度今の不良青年と少しも選ばない生活をして居つた人である、併し一旦自覺すればそれだけの立派な人が出來るのである。

又佛經中に現はれて居る所では、央崛摩といふ者が非常な惡人であつたけれども、釋尊に出會つて心機一轉するや立派な坊さんになり、阿闍世王は父母を弑したやうな極惡非道の人であるけれども、釋尊の化導に感激しては立派な人となつて、釋尊の遺教を結集してお經として後代に傳へる大事業を成遂げた。阿闍世王無かりせば佛敎の經典は今日に傳はらなかつたかも知れない、親を殺すやうな惡人が、三千年の後までも人類を救ふ釋尊の遺教を結集して遺すといふ、如何にも其の惡も大きいけれども善も

反省しなかつた、それが菊の花を作ること就て、  
 或は肥料をやり水をやれば美しい花が咲き、少しも  
 顧みられずして捨てられてあれば萎れてしまふとい  
 ふ其の實況を見て、非常に感激して心機一轉して立  
 派な人間になつて、自分が良くなるばかりではな  
 い、後から入つて来る不良兒を感化する手傳ひをし  
 て、感化院の助手となつて今も尚ほ働いて居る。

さういふ實例を見ると、人間が良い事に對して自  
 覺をするといふことは最も大切な事である、其の中  
 にも一番大きな問題は佛子の自覺といふことであ  
 る、それが自覺すべき人間の持つて居る心の中の最  
 高最大なるものであるといふことを御話しやうと思  
 ふのである。

### 一、眞我と眞佛

佛子の自覺といへば言ふまでもなく佛が吾等の父  
 であり、吾等は佛の子であるといふことを自覺する

吾々人間は自分の本體に就てどうしても二つの側  
 を考へなければならぬ、それは小さな我と大きな我  
 といふことである、死んで行く我と滅びない我と、  
 此の關係が自覺されないならば、人間自身の上に付  
 ての考の足らぬ人といふことになるのである。吾々  
 の本體は肉體の親が生んで呉れた時に始めて出來た  
 ものではない、形は其の時に出來たのであるけれど  
 も、其の内に在る魂といふものは生れる時に拵へて  
 貰つた譯ではない、死んで焼かれる時肉體は灰とな  
 るけれども、其の内の魂は灰となるものではない、  
 此の永遠に續いて行く自己といふことを知らなけれ  
 ばならないのである。それは多くの宗教が教へるも  
 のであるが、宗教ばかりではない、今日は哲學の知  
 識の側に於ても、人間の不滅の生命といふものを教  
 へて居るのである、それを知らない者は一人前の人  
 間ではないといふことになる譯である。人類の持つ  
 て居る現代の知識を知らない、唯昔から言來つた獨

事であるが、此の場合に於ける父といひ子といふの  
 は吾等の本體から考へて言ふ事なるのである。世に  
 は識見の淺い人があつて、佛を父といふたならば、  
 自分を生んで呉れた父と父が二人出來て衝突をする  
 ではないか、などと言ふ者がある。加藤弘之氏のや  
 うな先づ明治の大學者と稱せられた人だけれども、  
 それでも親が二人出來ては教育上困る、だから宗教  
 は信じられない、基督教を信すれば神様を父とい  
 ひ、佛教を信すれば佛を父といふ、そんな父が幾  
 人も出來ては困る、と言つて、教育と宗教は衝突す  
 るものであるといふやうな意見を堂々と發表して居  
 る。それをまた全國の小學教員の大部分が、如何に  
 も御尤であります、吾々もさう心掛けなければなら  
 ぬ、といふので、神や佛を父といふ言葉を使つたら  
 ぬ、それはいかぬといふ事だけ覺えて、教育上宗教の信  
 念といふものを無視して今日に來つたものである、  
 洵にそれは淺白な暗愚な考である。

斷的な言ひ方で「どうも魂ナンといふものは分らな  
 いから無いものだらう」……分らぬければ無いもの  
 だといふならば、人間は自分の知らない事が澤山あ  
 るのである。科學の知識に依つて研究をすれば科學  
 的に發見することが澤山あるけれども、其の知識の  
 無い者は殆ど知らない事ばかりである、百の中九十  
 九までは知らない事である。知らないものを無いも  
 のだと言つたならば、此の天地宇宙人間の世の中に  
 は何も彼も無いものだと言はなければならぬ。さう  
 いふ獨斷のことは許されないで、人間の魂といふ  
 ものは眞理の研究から言つても不滅のものであり、  
 宗教の信仰からすれば無論靈魂の不滅といふことを  
 認めない限に於ては宗教といふものは起らないので  
 ある。

之を何か非常に違つたもの、やうに思つて、「それ  
 は宗教だ」、「それは學問だ」といつて二つに分けて  
 置くことも實は餘計な話ナンで、本當の學問と本當

の宗教といふものは一つにならなければならぬ。學問から考へたら斯うだ、宗教から考へたら斯うだ：とそんなに違ふものではない。大體學問とか宗教とかいふ言葉は人間が便宜的に附けたもので、本當の人間の物の考へ方といふものは一つしかないものである。其の場合に、人間の本體といふものが生れる時に出来て、死んだら消えてしまふといふ、此の三十年五十年の短い間のものであつて、而も生滅あるものとして考へるだけならば、それは本當の自己を知らぬものである、斯ういふのが人間の正しい考へ方である。

そこで茲に眞我といふ滅びない我、大きな我、何も彼も具へて居る所の尊き我といふものを考へ來る時に於ては、是は今度の肉體の親との關係とは違ふのである、親は吾々の魂を拵へて呉れるものでもなく、又死んだ先をどうして呉れるものでもない。さうして此の永遠の我といふものを考へたら、人生の

の佛教で教へる所が本當の考へ方ナンである。さういふことは日蓮聖人の御遺文を拜すれば明瞭に至る所に説かれて居るので「法華經は内典の孝經なり」と言はれて、本當の孝養を完うせんとするならば法華經の信念にまで入つて考へなければならぬ、其の意味から言へば法華經は即ち親孝行の事を書いた儒教に於ける孝經のやうなものである。さういふ意味合の方から本當に我を考へて來る時に、其の本當の我と關係を持つ所の眞の永遠の父といふものを考へ來る時、それは何も肉體の親に影響を與へるものではない、寧ろさういふ信念を以て自分の親の永遠をも教ふといふ生きたる孝養の心が起るだけのもので、佛を眞の父として信するが故に現在の親を粗末にするといふ考が起ることゝななければ、又佛の方は肉親の親のやうに飯を食ふとか馬鈴薯を食ふとかいふことはないのであるから、佛を信するが故に親に送るべき食物を減さなければならぬ

三十年五十年は一瞬の瞬きするよりも短かいものである、宇宙の無限の時間から考へたならば、五十年や七十年は、時計の振子が一つカチツといふ間にも及ばない短いものである。其の永遠の我に就ては、肉體の父母といふものは何の關係をも持ち得ないのである、少しの時間が経過すれば親も死に、子も死に、何れも灰となり墓場となつて消滅してしまふ。戸籍の上では親子だと言ふけれども、そんなものは役場の記録も灰になるし、寺の過去帳も灰になつてしまふ、何が何やら分らなくなつてしまふものである。

併ながら永遠に滅びないものは、自分に就ての不滅の生命であり、親に就ての不滅の生命である。それであるから眞に親の恩を考へる上からも、生きて居る間だけ親に孝養を盡して、父母の永遠の生命が迷はうが苦しまうが續はぬといふのでは眞の孝行でないといふのが、佛教に於て教へる事であり、又其

とか、佛に着物を着せて親は裸にしなければならぬといふ問題ではないのである。眞の父は精神生活の力の源を與へられるものであつて、そこに本當の人間の力が出来て立派な働きが出来から、現在の親に對する力も益々増大されて、眞の孝行、眞の報恩の道を盡して行くことが出来る譯である。衝突するものではなくして、寧ろ孝養の道德の力を増加するものが即ち宗教の信仰であり、絶對の父を認識することに依つてそれが起る譯である。

そんな事はもう言ふまでもない程明瞭な事で、信心したら親を馬鹿にしたといふやうなことは問題にならない話である。そんな議論をする者は寧ろ社會主義といふか、人生を破壊する惡魔と同じ邪説である、さういふことを教育者が言ふとか、學者のやうな顔をした者が言ふとかすればそれは恐るべき惡魔である。宗教を信心すれば道德に害がある、などと云つて、信仰を呪はせるやうな事を、軟らかな子供

の頭腦に植込んで行くといふやうな者は、捕へて牢に打込んで尚ほ飽足らない罪惡を犯しつゝある者であると言つて差支ない。さういふ大きな間違ひを國家の文教の上に有して居つたならば、到底確な人間が出来た譯がない、我國も大分そんな間違ひを長く續けて来た譯である、此の頃は少しは解り掛けたけれどもまだ本當には解つて居ないだらう。其の解り掛けたのも宗教が本當に有難くて解つたのではない、社會主義のやうな狂暴な者が出て来て、それが言ひ居る事を聞くと、どうも自分等がやつて居ると同じやうな事で、宗教を否認するやうな事を言へばチャウド彼等の提燈を持つやうになる、といふことが判つて来て、吃驚して居るといふのが本當の話である、海に熊の悪い事デヤ。

それであるから正しい研究の上に於て眞の佛と眞の我が父子の關係を持つて居るといふことは、少しも差支のないことで、寧ろ其の觀念を打立てるこ

とに依つて眞の人間が生れて來ると謂はなければならぬのである。

此の場合の佛が我等の父であるといふことは、又基督教で言ふやうに、我等の魂を造り與へたといふやうな事とは違ふのである、其の點も佛教に依つて自覺する信仰には明にして置かなければならぬ。神と佛と雖も、何にも無い所から魂を拵へるごか、息を吹込んで人間を拵へるごか、そんな事が出来るものではない。凡そ天地の間に有とし有ゆる一切諸法は不生不滅といつて、總ての物、新しく拵へるといふことは——一微塵をも作ることは出來ない、又一微塵をも無くすることは出來ないといふのが即ち完全なる眞理である。その位の事は直ぐ解るではないか、ごのやうにしても全然無い物を有るやうにするといふことは、如何なる力を以てしても出來ない、何かそこに在る物を寄集めて来て一つの新しい形を作ることには出來るけれども、それは唯

寄せ集めて變化させただけのものであつて、決して無から有を生じたのではない。随てどのやうな少量なものでもそれを無くすることは出來ない、燒いて粉にして吹飛ばさうが、それは自分の眼に見えなくなるといふだけであつて、其の物自体は一微塵と雖も之を滅し去ることは出來ない。一切の物は悉く生ぜず滅せず、存在せるものは何處までも存在し、存在しないものは始から終ひまで存在しないといふことが眞理ナンである、さういふ觀念が分らなかつたならば人間の知識の源といふものは立たないのである。無い物が出來たり、有る物が無くなつたりするといふことならば眞理は目茶々々であつて、正確なる觀念を立てることは出來ない。それは哲學を學べばイキナリ其の事を明にするので、先づ人間の知識の出發點に於て、有る物が無いと言つたり、無い物が有ると言つたりするやうなそんな不確實な頭腦をスツバリ燒直して、確實に原因結果の眞理とい

ふものを押へて、其の物指から判斷を與へて行くのである。今の日本人の多數がボンヤリ考へて居るやうに、人間はフラ／＼と出來たのかも知れない、死んだらフツと消えてしまふのかも知れない……といふ、そんな醉拂ひみたやうな考へは人間の知識とは名けらるべきものではない。

それ故に吾々人間が佛の子であるといふことは、決して佛に作つて貰ふといふことではないのである。親が子を拵へると言つても、本當に作つたものは一つもあるものではない、唯有りしものに就てそれが變化を生じて來るだけであつて、人間の體の一本の髪の毛と雖も、一つの細胞と雖も親が拵へたものはない、やはり宇宙に存在せるものがそこに集つて形を成して來るだけのものである。親自身の體も其の通りで自分で拵へて居るものは一つもない、俺が拵へたなどといふのは粗末な考へで、時計屋が時計を拵へたとか、百姓が大根を拵へたとか言つても

決してそれは拵へたものではない、唯土を耕して種子を播いて、それが自然の榮養を吸収して大根になつたといふだけの話で、一つも百姓が拵へたといふものはない、そんな事はチョット考へたら直ぐ解る事である。

そこで佛教は眞理の教であるから、世間の人間がぼんやり考へたり、基督教が御伽噺に等しいやうな、神が宇宙を作るとか、神が人間を作るとか、そんな不合理な事は言はぬのである、そんな事を言ふたらそれが嘘であるいふことは直ぐに馬脚を露はしてしまふから、嘘で信心を續けるといふやうなことが出来るものではない。歐米人が永い間それで満足して来たといふのは、揃ひも揃つて變な人間が澤山生れたものだと思はれる。さういふ議論を以て假にも信仰を察して来たといふ點は、偉いといへば確に偉い、中々手品使ひの上手な人間である。東洋人にはどうしてもそんなことは出来な

い、印度の舊い時代の宗教、釋迦以前のウパニシャッドといふ波羅門の宗教と雖も、宇宙を作るとか作らぬとかいふ問題に就ては非常にやかましい議論があつた、梵は自然である、決して作ることは出来ないといふ議論は、釋尊以前に既に發達して居る東洋の哲學である、それが今頃になつてまたその問題が分らぬといふに至つては、餘りに時代遅れの話と謂はなければならぬ。

佛教は最初から有作無作といふ言葉を使つて居る、作といふのはツクルといふ字であるが、若しも作ると言つたら今度は壞れるといふことが直ぐにヒツ付いて居るのである。だから有爲といふことも非常に賤しむべき言葉になつて居るので、爲すこと有りとか、作ること有りといへばそれはもう非眞理なものである。だから人生を有爲轉變の世の中といふて、有爲と言ふたならば轉變といつて、クラツとヒツ繰返るといふことが必ず伴ふのである。そこで

「有爲のおくやま今日こえて」さういふ迷ひのモヤ／＼した所を突破しなければならぬといふことは「いろは」歌でも教へて居るではないか。

そこに佛教の健實なる眞理に基いて打立てられた教の尊さといふものを知らなければならぬ。唯ボンヤリと同じやうだと言へば、それは堀立小屋も堅牢な建物も同じやうに見える、帝國ホテルであるとか三菱銀行の建物のやうな、地震に出會つても少しも動かぬ建造物も、一遍にガラ／＼と倒れてしまふ建物も素人が見れば皆同じものである。けれども所謂震動を受けて而して後に家屋の堅牢を知るといふやうな譯で、此の時代に於ける思想の動搖批判を経

て間違つて宗教と、そこに眞理の基礎に於て確固たるものを有する宗教との優劣を考へて行かなければならぬのである。今日は宗教に就ても唯ボンヤリとどれでも宜いなどと言つて居る時代ではない、有ゆる宗教が基礎に動搖を來して顛倒せんとして居る、

それが爲に一方には唯物思想が跋扈して人類を毒して居るのである。唯物思想の害毒は無論惡むべきであるけれども、そんなものに壓倒されて行く薄弱なる宗教も亦其の責任を分たなければならぬ譯である。唯物思想が人類を災ひに陥れんとする場合に、一方に健實なる宗教があつてその唯物軍の鋒先を打砕くといふことに於て、始めて人類は救はれるのであるが、それを打砕き得る宗教は世界に唯一つ佛教あるのみであるといふことに歸着するのである。唯ボンヤリと「どの宗教が良いだらうか……マアどれも同じだらう」と考へて居るやうな生温い頭腦は、今日何の價値もない自覺せざる所の宗教の求道者である。

さういふ意味に於て佛教の教へる佛と我等との父子關係といふものは、拵へたとか拵へないとかいふ關係ではない、吾々人間には向上して佛にならうとする力があり、佛の方には吾々を導き引立て、佛に

しやうとする力がある、此の子として親を慕ふの心、親として子を愛するの心が最も密接なるものである。普通の親子の關係では、其の愛の心も慕ふ心も或る時間に依つて消去つて行くものである、親が幾ら子を愛すると言つても、其の親も死んでしまひ子も死んでしまふのであるから、それでも子を愛するといふことはない、もうそこで中斷されてしまふ譯である。けれども佛と我等の關係に於ては、我等も無限の生命であり、佛も實在の力であるが故に、何處まで行つても其の愛の力と向上せんとする力は絶えないのである。吾々が永き流轉を辿つても、そこに滅びざる佛性があつて目覺めんとし、佛に歸らんとするのである、佛はまた如何なる所に生れて行つても其の者を救はうとする慈悲を捨給はざるものである。其の關係が實に徹底的に存在するので、それを親子の關係と謂ふのである。吾々の目覺めて佛にならうとする無限の向上を辿る心と、佛の何處まで

も救はなければ己まぬといふ無限の慈悲と、其の關係に於て親子といふことが成立つて居るのである。さうして人間の心の中には色々の性質があつて、佛敎の敎から言へば地獄から佛に至るまでの十のものを有するけれども、其の中に於てそれが一體我等の本性であるかといふ問題になると、結局は佛になるのが自分の本性であるといふことになる。さうすると人間に生れて居るのも是は迷つて居るのである、餓鬼や地獄に行けば無論迷つて行くのである、人間が生地か、地獄が生地かといふことになる、色々の性質を持つては居るけれども、佛になり切つた時が本當に生地が現はれた時である。其の生地は現はれた時はもう逆轉しなひ、それが本當の自己である。さうすると其の佛にしてやらうとする慈悲と、佛にならうとする渴仰との結合點が本當の親子の關係であるといふ意味を茲に現はして來たものである。ボンヤリ考へて居れば、人間は人間の姿が即

ち自分だと思ふか知らんけれども、眞の我、魂の方からいつたならば人間の姿は一時の現はれであつて、本當の生地ではないのである。

問題になつて來る譯である。

### 三、三種の佛性

そこに非常に大事な宗教の關係を生じて來るのであつて、それを明瞭にするのが三種の佛性論である。

それ故に其の佛と吾々との親子の關係が一層緊密になつて行くのは、そこに目覺めた渴仰と、それから慈悲の我等に加はつて居る場合に於て、一層此の父子の關係が明になるのである、今申す本質的に我等が、佛を慕ふ佛性といふものが心の奥に潜んで居るけれども、それが隠れて居るといふ場合は、佛の子には違ひないけれども完全に子といふ意味が現はれて居ない。又佛も我等の親に違ひないけれども、若しも佛が横を向いて居られたならば本當の親の意味が現はれて居ないといふ謂はなければならぬ。佛は我等の方を向ひて慈悲を降し給ひ、我等は佛の方を向ひてそれに歸らんとする時、そこに本當の親子の關係が一層明になつて行くのである。茲に本質的の親子の關係と實際的の親子の關係との二方面が

吾々人間には畜生の性も餓鬼の性も皆有つて居るけれども、併しそれ等は本當の性ではない、本當の性は佛性である。それは澤山の性を皆有つては居るけれども、そこに主客といふものを吟味しなければならぬ、十の性の中のどちらが主人であり、どちらが居候であるかといふ關係を論究して行くときに、迷を有つて居る方は居候であり、悟り上げた方は主人であるといふ事が解つて來る。何故かといへば力が違ふ、迷の方はその時々に斷れて行つてしまふ、人間に生れたかと思ふと餓鬼に行く、餓鬼に行くかと思へば地獄に行くといふやうに、その時々



轉變して行く。之に反して一旦佛の性が顯はれればモウ永遠の佛であること故に、それが主人であるといふことが解るのである。他は時々々に現はれては消え、現はれては消えして行く生死流轉を辿るものである、一方は生死を解脱して常樂我淨の状態に置かれるものであるから、そこで同じやうに有つては居るけれども佛の性質が眞の我であり主人であるといふことになるのである。サウ論結してその意味を信することに於て、人間は非常な喜悅があり、力が出て來るのである。それがグラ／＼して、ごつちが主人やら居候やらわからない、コロ／＼轉げ廻つて六道を流轉するといふことであれば實に情けないけれども、六道は流轉するが佛界に昇れば生死を解脱して再び退轉すること無しといふ所に於て、人間は非常な歡喜があるのである。どうしてもそこ迄上つてしまはなければならぬ、双六をやつてもコロ／＼進んだかと思ふと又後戻りをするといふのでは

あるのである。三種の佛性といふのは

正因佛性

緣因佛性

了因佛性

の三つを謂ふのであるが、第一の正因といふのは、本來衆生の有つて居る性質に在る佛性を謂ふのである、であるから是は誰でも有つて居る、善人でも悪人でも、信者でも未信者でも皆有つて居るものである。第二の緣因佛性といふのは、それが覺醒めて善い事をするやうに、佛性の一部が働いて出るのを謂ふ。第三の了因佛性といふのは、その善い事の中の一番善いものを押へて、これに依つて必ず佛性が顯はれる、他のいろ／＼の善い事で少しづつ顯はすといふ力でなしに、これならば必ず佛性を顯はして佛に成り得るといふものを謂ふのである。緣因と了因は、他から加はつて來て佛性を顯はす力を申すので、正因は自分に有つて居るところの佛性を謂ふのであ

いかぬ「早く上り」といふ所に入つてしまはなければならぬ。そこへ入つてしまへばモウ下へ降りて來ないのだから、そこが狙ひ所ぢや。それが即ち佛性の信仰となつて居るのである。双六の途中で行つたり戻つたりして居る間は、どんな良い所に行つても例へば料理屋といふやうな所に行つてこれはうまいナと思つて居つても、又停車場へ逆戻りといふ事になるから、どうしても上りといふ所まで行かん限りには安心が出来ない、即ち佛様にまで成つてしまはなければならぬ。欲望の低い者は、そんな面倒な所まで行かなくても料理屋で結構、手さへ叩けばどんな御馳走でも持つて來るから……思つて居るけれども、その御馳走も食へば無くなつてしまふ、日が暮れても蚊帳も無いといふやうな事になる。さういふ人間の小さな欲望を以つて宗教を見てはいかん、完全な不滅の幸福に達しなければならぬ。そこで三種の佛性といふことを明瞭にする必要が

る。これを解り易く譬へて言ふならば、正因は健全な婦人の身のやうなものである、それが子供を産むだけの完全な素質を有つて居るのである。併しどんな健全な婦人でも獨身では子供は出來ない、そこに良人が無ければならぬ、その良人が了因種といふものである。良人があつても婦人の身が病氣であるとか、御飯も食はずに瘠せ衰へてしまつたならば、妊娠はしても親も子も遂に死んでしまふといふことになるから、榮養を吸収し、風呂にも入つて腰が冷えないやうにするといふやうな事の伴つて行くのが緣因佛性といふことである。その正因の婦人の身と、了因の良人と、緣因の榮養等を用ひることに依つて、完全に珠の如き赤ん坊が生れて來るといふことになるのである。

その關係は、一切のものがその通りであつて、ナニも婦人が赤ん坊を産むばかりではない、稻なら稻が生えて來るのでも、先づ稻の種といふものがあ

る、これが腐つて居つたならば生えるものではない。その種を田圃に播いて水を入れたり肥料をやつたりする。併しその中に於て稻を育てる一番強い力は日光である、お日様の光と、お日様の熱といふものが無かつたならば、いくら肥料をやり、草を除き、あらゆる手段を講じて、どうしても稻は實らない。だから稻の種と、お日様と、それからその他の生育を助ける力といふ風に考へなければならぬ、稲が芽を吹いて熟するに至るその主因といふものは太陽に取らなければならぬ。その如くに、吾々が佛性を顯はす主因は何れに在りやといふ所に宗教は生じて来るのである。その主因といふものを忘れたならば、それは婦人が御馳走を食べたり、温泉へ入つたりしたら子供が出来ると思ふやうな話である、それは子供の生れる準備はスツカリ出来て居るけれども、どれ程御馳走を食へても温泉に入つても、良人といふもの無しには子供は生れない。基督は良人な

しに處女のマリヤから生れたといふけれども、これは特別であつて、二人と望むべからざる事である。佛教では、基督と雖も良人なくして生れたといふことは許さない、釋迦如來の教から言つたならば、そんな事は問題にならぬ。その合理的なる説明に於いて、佛子の自覺といふに就てはこれをハッキリ知らなければならぬ。たゞ自分に佛性がありさへすればそれで足りると思つて慢心してしまつてはならない、禪宗の坊さんなどはそんな慢心があるから、「我に佛性あり、佛などは要らぬ」と言ふ、それは丁度婦人が、自分は健康な身だから亭主などは要らぬと言ふやうなものである。近頃の自覺した婦人といふ連中は、男と喧嘩をするといふやうな事を言つて、それで子供を生んで居るけれども、それは良人は定つて居らんが何處かで仕込んで来るから子供が出来る、徹底的に男と喧嘩をして居つたならば決して子供を産むことは出来ない。

だから禪宗の坊さんが言ふことは、今日の吾々から見れば不良性を帯びた女性解放運動家の言ふやうな話で、自分は亭主は有たんけれども子供は立派に産んだぞと言つて威張つて出て来ても、少しも感心する所はない。我に佛性あり、佛などは要らない、見性成佛……ウンと言つたら佛に成つたといふやうな事を言ふ、それは女學生がウンと言つたらお腹が大きくなつたといふやうな話で、不合理千萬な事と謂はなければならぬ。やはり宗教としては對象として信する佛様の大事なことを知り、妻として言へば良人が無ければならない、國民としては國體といふものがあつて、殊に日本の如き國民性は、皇室の尊嚴を戴くことに依つて斯様な立派な性格がつくられたものである。富士の山とか櫻の花とかいふものは皆日本の國民精神を養ふ力だけれども、富士の山と櫻の花だけ見て居つたんでは、この忠勇義烈の國民性は出て来ない、藤田東湖が正氣の歌に頌つた通り、

『秀でては不二の嶽となり巍々として千秋に聳立ち、發しては萬葉の樓となり衆芳與に儔たり舞し』といふやうな事も、大和魂をつくる自然の力だけれども、それは所謂縁因である、了因は即ち萬世一系の天皇である『神州孰か君臨す、萬古天皇を仰ぐ』といふそこに、大和民族の國民性が養成されたのである。

斯ういふ説明は何處へ持つて行つても合理的なものであるから、チャンと筋が立つのである。そこが基督教などと佛教の違ふ所以である、基督教などはアツと言つたらマリヤのお腹が大きくなつた、フツと言つたら神様が人間を拵へた……手品使ひみたやうな事を言ふから誠に怪しい事だけれども、佛教はさういふ不合理な事は最初から言はない。佛教では因明といふものが非常に發達して居る、因明とは今日の論理學である、思想を捌き、言語を裁く法則がチャンと定つて居つて、そんな馬鹿げた事は言はう

としてもヨウ言へないものが佛教である。華嚴經を讀んでも或は涅槃經を讀んでも、釋迦如來はさういふ思想の誤謬を矯正する大先生である、世俗の考は此點が間違つて居る、婆羅門の考は此點が間違つて居るそんな間違つた事を以て判斷してはいかん、我が教は斯の如き真理の教である、すべての學問も宗教もその間違ひを矯正して我が教に來れと説かれて、真理の光を與へた宗教である。今日も世界の人間が小さな學問や理窟や下らない宗教に迷うて居るのを照す真理の光が佛教である。

そこで法華經を見ると、この三つの意味がハッキリ現はれて居る。先づ正因佛性の意味は、譬喩品の主師親三徳の文の所がそれであつて、

『其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』

とある、この三界に生を享けし者は善人惡人を問はず、信者未信者を問はず、生きとし生ける者悉く吾が子であると言はれたのは、その奥に有つて居る

頭を下げるのも、華を供へるのも、香を上げるのも、或は世の中の人々に親切にするのも、小さな善根でそれが皆佛道を成する力であるといふことが方便品に説かれて居るが、それは即ち緣因佛性を指すのである。了因佛性の一つが最も大事なことになるのであるが、それは寶塔品に

『是れ眞の佛子なり、淳善の地に住す』

とある、その淳善といふ、誠にすなはな所に坐つて、さうして眞の佛の子といふことになるには、佛様の教、その中にも眞實の佛を奉じて、佛様の思召に適ふやうになつて行くことを、これを了因佛性といふのである。

即ち緣因は廣く善根を指すのであつて、擴げれば六波羅蜜 悉く緣因佛性といふのである。了因は信心を指すので、本佛に對する渴仰の心、信心を指してこれを了因佛性といふのである。前に申した國家の例でいへば、いろ／＼の善心を起して教育事業と

佛性があるからして、それを呼んで 悉く吾が子と仰せられたのである。それは正因佛性の意味から言ふのであるから、この場合は惡人でも未信者でもそんな事は問はない、皆佛の子だと仰しやるのである。それから緣因佛性の意味は、彼の授記品の中に、酒に酔うて珠を忘れて居つた人間の話が出て居る。友人が他國に行くに就いて、醉拂ひの袂の中に珠を入れて行つた、お前は今は酔うて居るけれども、目が覺めて困る事があつたならばこの珠を取出してこれを價に換へたならば決して困ることはないと言つて行つた。併し醉拂ひはそれを氣が附かずに、乞食になつて流浪して居つた、そこへ友人が歸つて來てその事を話して呉れたので、初めてその珠を取出して幸福になつたといふことがある。その珠かけながら迷ひぬるかなといふ所は緣因佛性を謂ふのである。さうしてその緣因とはすべての善根を指すのであるから、法華經の小善成佛といつて、佛様の前に

か社會事業とか公利公益の爲に盡すのも、皆是れ日本國民の美點であるけれども、就中忠君愛國の精神を以つて皇室國家に對し奉る所が本當の日本人の魂であるが如く、一切の六波羅蜜菩薩行は皆悉く緣因であるけれども、本佛の大慈悲に感孚感激するところの信念の心、これを了因佛性と申すのである。それなくして他の事をやつた所が駄目である、日本人が皇室の尊嚴を忘れて、さうして貧乏人を救ふとかいろ／＼の道德的行動をやつて居るからといつても役に立たないのである。どんな善い事をしてても皇室の尊嚴を忘れては駄目であるといふが如くに、本佛に對する信念を除いての善は即ち良人なくして子を産まんとするが如きもので、温泉へ入つて御馳走を食へて居る婦人が幾ら肥つても子は生れぬと同じ事である。そこに宗教といふものを生じて來るのである。日本の國民道德といふものは皇室に對する觀念に依つて生ずる、社會的善根ならば國民道德といふもの

ではない、それを履き違へるから救世軍などが、貧乏人さへ救つたら宜い、忠義の心などは日本だけのもので大したものではないといふやうな、間違つた事を言ひ出すのである。社會善も大事であるけれども、日本に取つては皇室に對する忠愛の心が根本である。忠愛の爲に社會善を行ふのでなければならぬ、本佛を信するが故に菩薩行を行すのでなければならぬ。

この綱格を明にして行く所に法華經の教があるのである。その綱格が立たぬものであるから、時に依れば社會問題の爲に皇室を呪ふやうなこゝになり、貧乏人の味方であると稱して爆裂弾を執つて至尊陛下に向はんとするやうな、共產黨などといふ不逞の徒が出来て来るのである。佛教の中にもそれと同じやうな綱格の立たない者が昔から澤山出来て居る、それが爲に日蓮聖人の四大格言といふものが現はれたのである。

難さを忘れて居る、狂へる子である、それは藥を服まして癒してやらなければならぬ。一旦覺醒めて眞の佛子となつた以上は又元の狂へる子に復るなどといふ事のあり得る譯はない、一旦本佛の限なき慈悲に感激した以上は如何なる事があつてもこれを忘れないやうにして行くのが法華經の信仰である、一旦自覺して皇室の有難さを身に感じた以上は、少々ぐらゐの思想や學問を研究しても、それで皇室の尊嚴を忘れるやうな事がつてはならぬ。この宗教情操、國民情操といふものは、そんなにグラ／＼すべきものではない、少し位の學問や理窟でまごつく者は輕佻浮薄の徒といつて、飛上り人間である。人間一たび大事を決した以上は左様にグラつくべき筈のものではない、日蓮聖人もその事を仰せられて居る、一旦信念を打立てた以上は、如何なる事があらうとも動轉してはならない、そこに人間の價値が現はれて来るのである。

新様にして三種の佛性を能く心得て、自分の有つて居る佛性と外から加はつて来る力、すべての善根と中心の本佛に對する信念といふものとの結合に於て本當の我が頭はれて行く、茲に佛子の自覺といふものが起るのである。正因佛性としての自覺と了因佛性としての自覺、殊に了因佛性が最も大事なので、それを自覺するのが眞の佛子である。勝鬘經にも眞子章といふ一章があつて勝鬘夫人は同じ佛子といつても覺めざる佛子は役に立たない、どうしても覺めて佛様の有難い事に感激を有つて進んで行く眞の佛子とならんければならぬと申して居るのである、法華經の自我憫にもその事が説いてある、たゞ佛の子と言ひ放してはいけない、親の子であつても親を思はぬ不孝の子となつては何にもならない、狂人の子となつては親に心配をかけるだけである。所がお自我憫の中に「狂子を治せんが爲の故に」とあつて、子ではあるけれども毒に中てられて父の有

#### 四、佛子の行道

その佛子の自覺に立つた以上は、佛子の行道として覺醒めてどういふ事をして行くかといふと、今申した通り信心と菩薩行である。信心が了因佛性であり、菩薩行が緣因佛性であるから、良人はあつても婦人が自分の身の養生をしなければならぬが如くに信心があつてもやはり菩薩行といふものを積まなければならぬ。良人は大事に違ひないけれども、良人さへ大事にしたら飯は食べないでも宜いといふ譯にはいかなない益々身體の壯健を圖らなければならぬ如く信心する以上は他の善心が増大して行くやうになつて行くのが宜しいのである。それが佛子の行道であつて、その信心とは本佛に對する渴仰敬慕の心である法華經を信するからといつて、お経が一番大事だとか、いろ／＼議論があるけれども、この佛子の自覺といふ事を徹底して考へて來れば、畢竟するに

佛様の大慈悲から出て出現說法といふことが起つたのである。釋迦如来として世に出られたのも、一切經を説かれたのも皆吾等を救はん爲の本佛の慈悲である本佛の慈悲の中からあらゆるものが現はれて居るのである。釋尊の世に出られたお身、お仕事の全部が本佛の慈悲の活現である一切經にいろ／＼の眞理を説かれるのも、慈悲の心の現はれの中に眞理を説かれるので、出現說法の全部が本佛の大慈悲の活躍である智慧に相對して居る慈悲を言ふのではない、法華經と他のお經との相對して居ることではないので、根本的に申せば本佛の大慈悲の活躍の中に出現說法があり十方の應現があり一切のものは本佛の慈悲の中に包含されるものである。

その意味を感激する所に法華經の信心があるのである。能く考へて見れば釋尊として此の世に出現せられたのも、諸佛菩薩としての活現も、一切經を説かれるのも、過去は久遠の昔より、横は十方世界に

亘つて廣大無邊の活躍は、たゞ本佛釋尊の大慈悲の御心の作す所なりといふことに感激をして、そこに有難いといふ心を持つのが法華經の信心である、壽量品に依つて教へられた信心といふものはそれである、智慧と慈悲と比較して見たり、お釋迦様と阿彌陀様とどつちがえらいとか、そんな事にマゴ／＼するやうな信心ではない、イキナリ絶對本佛の大慈悲に突入した所に法華の信仰といふものはある。

それを根本にして今度實際の働きは、お經を讀むことも無論結構であるし、説教を聞きに来ることも結構である、それからいろ／＼の善根をすること皆結構であるけれども、要するに菩薩行の意味に於て考へなければならぬ。お經を讀むからといつても、我慾の精神や酔拂つた精神で、「これを讀んだら効能が現はれて来るだらう——」その効能といふのは物質的事ばかりで、商賣が繁昌するやうに、金が儲かるやうに……そんな事ばかり考へて居つてはい

かぬ。商賣の事も思ふが宜いけれども、それは商賣に勉強してやつて行けば宜いので、信心だけで商賣が繁昌するなどと思ふのは愚な事である、商賣には商賣の道を學んでそこに熟練しなければ、これから世の中は生活といふ事もだん／＼困難になるから、唯だお賽錢を投げさへすれば商賣が繁昌するナシと思つて居る人間は、必ず社會の落伍者となるだらうと私には思はれる。どうしても商賣の道には益々熟練して、さうして勤勉にやつて行かなければならぬ、さういふ力の現はれて来る根元に信心があるのであつて、商賣の方はノラクラして置いて信心の所があるから決してうまく行くものではない、それが行くやうな事を言ふ坊主は世を毒するものである。さういふものは警察權を以て取締らなければならぬ、宗教の看板を掛けたからといつても、世の文化を造り成す上に害毒になるやうなものは許さるべ

きものではない。宗教はモツと根本の精神の力を本當に教へて行かなければならぬ。

それは一切經を通じて、私の今お話しして居る事が本格なのであつて、お釋迦様は何時でも職業に勉強せよ、信心が大事だからといつて商賣を疎かにしては駄目だといふことを始終仰しやつたのである。お釋迦様の當時に佛教を信じた者が夜逃をした者があつた、阿難が顔色を變へて歸つて来て「あゝいふ信者が夜逃をするやうな事になつては佛法に瑕が附きます」と言つて心配した時に、お釋迦様は「ナニもそんなに心配をせんでも宜い、彼は信心はし居つたが商賣不勉強であつたから失敗したのである、我は常に商賣の事は其の道に勉強しなければ、信心にまけて商賣を横着しては駄目だぞといふことを説いて居るに拘らず、それを守らない、我が教を半分しか信じないが故に夜逃をしたのである、その好い見せしめである、決して佛教に瑕が附くところではな

い、佛の教の完全なる事を證明するものだ」と言はれた、それが本當の話である。併し信心をして居れば自分の氣持も良くなるし、人に接する態度も良くなるものであるから、我慾が減つて來れば却つて商賣が繁昌するといふことは合理的に説けるだらうけれども、唯だ信心さへして居れば神秘的にボン／＼錢が儲かるといふやうなものではない。宗教の信念があればその人の商賣に對する心懸なり態度なり方法宜しきを得て發達するものであるといふ風に、合理的に説明されなければならぬのもである。そんな事はわかり切つた話で、今後の人間の常識として當然了解さるべき事柄である。

そこでどうしても信心と菩薩行といふ語を能く記憶して、それが佛子の行道であることを知らなければならぬ、始終自分の頭腦には、我は佛の子である肉體は太郎兵衛の子であつても、眞の我は本佛釋尊の愛子なりといふ自覺を有つて、事々にその信心と菩

の自覺に立つて菩薩道を行じて當に佛と作るべき人であるが故に、我汝を教ふなりといふ心持で唱へるのである、それは實に法華經の徹底した教化方法である。そこへ行けば、信心と商賣が混線したり信心と不養生が混線したりするやうな、そんな愚なことではない、モツと高潔なる意味に於て了解せられたる宗教である。

さういふ意味に於て、今後世界の宗教思想の共進會に於て最優等を占むるものでなければ、闊浮提内廣宣流布とは言へない、法華經が世界に弘まるナンといふ事は言へないではないか。唯だ手前味噌だけで威張つて見ても世界の宗教思想の中に持出せば顔色もなく引込まなければならぬ。今日の所謂ドンドコ法華といふやうな信心のやり方を慶面もなくやつて居るといふことは、實に法華經の御爲にも、日蓮聖人の御爲にも申譯のないことである。今日少し位の仲間が多いとか寡いとかいふやうな事は問題にな

薩行とに活き／＼した活動を續けて行くのが佛子の自覺といふものである。それは表面如何なる間違つた事をして居るやうな人間でも、その精神の奥を啓けば佛の子である、その證據にはこれを覺醒めさす方法を執つたならば必ずやそこに反省するものである。それが法華經の不輕品に現はれて、不輕菩薩が人々に覺醒を促したのである。即ち

「我深敬汝等不較輕慢所以者何 汝等皆行菩薩道當得作佛」

お前達は必ず菩薩行をやつて皆佛に作る人であると言つて自覺を促して巡つた。日蓮聖人は、この不輕菩薩の二十四字は日蓮の今の題目の五字と同じものだ日蓮は不輕の後を繼ぐ者なりと始終言うて居られる。吾等が南無妙法蓮華經と唱へて人に聞かせる言葉は、汝は佛性を有す、佛子の自覺に立つてさうして信心と菩薩行に覺醒めなければならぬ、今それが解れば結構、今は解らなくとも、何時かは必ず其

らない、覺醒めざるが故にマゴ／＼して居るのである。本當に宗教の正邪曲直を調査研究するといふことになつて來たならば、一人の主張と雖も正義の在る所は從はざるを得ないのである。必ずや法華經の此の思想は、世界の宗教思想の中に於ての最後を支配するところの最優等なるものである。そこに日蓮聖人が命を捨て、法華經の御爲に絶叫せられた一代の奮闘が出たのである、日蓮聖人のあの大決心は、法華經が完全なる宗教であるといふ事を確信せられた結果である、決して物好きにやつた譯ではない。

### 五、佛子の聖語

それ故に日蓮聖人の聖語の中に於て、佛子の自覺に關する點を一二御紹介してこの意味を明かにして置きたいと思ふ。立正安國論の中に

「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや」

と仰せられて居る。佛法の衰微は坐視するに忍びない、どうしても佛教の復活興隆をはかる爲に奮闘しなければならぬ、併しその決心の起る根本は弟子一佛の子と生れて——日蓮は幸にお釋迦様の子であるといふ自覺をもつて、諸經の王たる法華經に事へてこれを弘むる身となつたのである、たゞの坊さんとは違ふといふ所からあの如く發憤興起せられたのであるから、この「一佛の子と生れて」といふ佛子の自覺が、日蓮聖人の彼の熱烈なる護法行動と現はれたと謂ふことが出来る。是れ即ち信心並に菩薩行の最も大きな目的に現はれて居る模範である。又法華取要鈔の中に

「我等衆生は五百塵點劫より已來教主釋尊の愛子なり」と仰せられて、我等は今まで自覺せずに来たけれども、法華經の教に依つて反省して見れば五百塵點といふ始なき以前から教主釋尊の愛子として慈悲の光を受けて今日に來つて居るのであると言はれ

判らぬといふことになれば、その子は猫の仔も同じだといふので、「三皇已前は父を知らず、人皆禽獸に同す」と言はれる。佛教を信するといひながら毒量口を知らない、本當の佛、本當の父が判らない、眞我眞佛の關係が判らないから禽獸に同じきものだと言ふのである。それはナニも強い言葉も弱い言葉もない、父を知らざれば禽獸だといふことは相場がきまつて居る。「どうも禽獸といふのは少しひどい、とぼけた人間ちやといふ位の所に置いて置いたらどうだらう」……そんな割引をすべき餘地は無い。又「それは諸宗の學者であるから法華の方は忘れて居つても宜い」……といふ譯にはいかない、法華を信じながら毒量品を忘れれば、二重にも三重にも禽獸と謂はれなければならぬ、題目を唱へながら毒量品の本佛を父としての意識を喪つて、それで日蓮教學が成立つなごと考へて居る人達は、それが其の儘禽獸の中の禽獸ちやといふことになる。斯う論斷するの

て居る思へば久して事である、佛の子でありながら父を知らずして今日に來たのは誠に情けないことであつたと言はなければならぬ。又開目鈔には

「毒量品を知らざる諸宗の學者畜生に同じ、不知恩の者なり」

と書かれた、非常な激しい言葉のやうであるけれども、父を知らざれば禽獸に同じといふことは古來東洋の通り相場である、孟子も「父を無する者禽獸に非ずして何ぞ」と言つて、子にして父を蔑ろにするとか、忘れるとかいふ者は禽獸であると斷定して居る。その意味に於て日蓮聖人は「三皇已前は父を知らず人皆禽獸に同ぜしが如し、毒量品を知らざる諸宗の學者畜生に同じ」と書かれたのである、三皇已前といふ支那の舊い時代には、夫婦の制度未だ立たざるが故に、その子供が誰の胤であるか判らぬ、猫が仔を生んだやうなもので、黒猫の仔か、三毛猫の仔か判らぬ、それと同じく人皆父を知らない、父が

が、日蓮聖人の開目鈔を書かれた御精神なりと私は信するのである。此の事はどうしても徹底して置かなければならぬ、佛教を信じなければそれは別問題である、日本人でなければ問題は別になる、日本人である以上は、皇室の尊嚴を忘れるといふことは非國民である、日本人に生れて居つて共產黨などを組織すれば、それは當然制裁を受けなければならぬ。佛教を信じ、殊に法華經を信するといひながら、本佛の我が父で在せられるといふ意味を自覺せざるに於ては、狂へる子と謂はなければならぬ、それを日蓮聖人が開目鈔の中に仰しやるのである、禽獸といふ語は單り諸宗の學者に限らない、毒量品を知らざる者は内外を問はず禽獸に等しい者ちやといふことになる。又開目鈔の後の方には

「子とは法華經の信心了因の子なり」

といふ事がある、是は涅槃經の、女が子供を伴つて流浪したといふ話を引かれて、子供さへ捨てれば世

話をして呉れる人があるけれども、可愛い、子供を捨て、自分だけ助かるといふ氣にならない、何處までも子を離さずして、遂に恒河を渡らんとして溺れた、その時も子供を捨てれば自分は助かつたけれども、子を捨て、自分だけ生きることが出来ないといふので、遂に母も子も俱に水底に没してしまつた、併しその子を思ふ切なる愛の心の功德に依つて、その女は直ちに天に生れた。斯ういふ涅槃經の文を引かれて、その母親が死んでも離さなかつた子といふのは法華經の信心、了因の子である。即ち佛法を信じて佛様の有難いといふことを考へて、その了因の子を大事にして、如何なる迫害の中にもそれを捨てないやうにするのである。即ち日蓮聖人が釋尊を信じて、頭の座に据えられようが、流罪に遣はうが、「諸天も捨てたまへ、諸難にもあへ、身命を期とせん」我はこの本佛の大慈大悲に感激したる精神は斷じて捨てないといふ決心を以て進まれた、それを

「信心了因の子」としてお教へなされて居るのである。了因といふのは前に言ふ婦人の子を産むことに就て言へば良人の存在に當るのであるから、どうしてもお釋迦様を大切にしなければ法華の信心は成立たない。女房が子を産むといふにはいろ／＼原因があつても、良人を大切にしなければ子といふものは出来ぬ、それは動かすべからざる事である。良人を無視して生れた子供が本當のものと言へないと同じく、法華の信仰に於て本佛釋尊の慈悲に感孚する精神を捨て、は、眞の佛子といふものは成立し得ないものである。

又持法華問答鈔には  
 「我即是父の柔順の御すがた見奉るべきをも末と仰せられて居る『我即是父』とは『我は即ち是父なり』といふ信解品の文を引かれて居る、併しその義理は壽量品の意味に於て引かれるので、壽量品

の『我亦爲世父』の文でも同じことである。とにかく釋尊が我等の父だと名乗られたそのお父様のやさしい御姿をば未だ見奉つて居ない、どうぞ會ひたいものだといふ懐れの精神に活きなければいけない。それが爲に『暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも』本佛を思ひ起すことになるのである。さうして『いかなる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れん』たゞ朝晩といふばかりではない、往いて言へばいつも／＼佛様の方は休みなく我等を感みたまふのである、親は雨が降るにつけても風が吹くにつけても、子供は今どうして居るかど案じて居るけれども、子は時に父母を忘れて居る事が多い。今釋尊は我等の父として、五百塵點劫來慈悲の心を捨てたまはな

れようとても忘れられないことである。梅尾の明惠上人はこの壽量品の毎自作是念の文を聲を揚げて讀み得なかつたといふことである。『毎に自ら』とはどういふ事であるか、いつも／＼佛は我等を感れみ給ふのである、我等はそれを忘れて五百塵點劫といふ永き時間を経て來た、考へれば餘りに永い迷ひであつた、一度や二度は覺めても宜かりさうなものであるのに未だに覺めなかつた、今度此の文を拜して覺めて居るべきであるのに又もや忘れ勝ちになるといふことは、如何にも淺ましい事ぢやと思へば、感涙あふれて此の經文は聲を揚げて讀むことが出来なかつた、隨處所可度爲說種種法」とまでは聲が出るけれども、『毎自……』とかゝる時明惠上人は聲を發し得なかつたといふ。日蓮聖人もそれと同じ感激を以て、『いかなる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れんやと』仰せられたのである。さうして此の感激を本にして信心および菩薩行に進んで行けば如何なる



本多祝下新著

### 法華經要義

定價金三圓

### 日蓮主義の心髓

定價金一圓八十錢

事をも成就するのであつて、自分の現當二世所願成就はもとより、七難即滅七福即生、現世安穩、往いては佗國優遇の難をも除いて、國家の安泰にまで此の信心が役立つものであるといふことを述べられて居るのである。

要するに信心と菩薩行を進めて行くことに依つて自分も救はれ人も済はれる、それを單に自分が自覚するのみではない、佛子の自覚を他にも與へて、自覚々他で自から覺り、他を自覺らしめて、一人より二人と普く一切衆生に及ぼさんとするのが法華經の宣傳であり、日蓮聖人の大願に参加する所以である斯くして佛子の自覚を鮮かに意識して、愈々本佛を渴仰し、歩々題目を唱へ、この佛子の自覺に活きて信心と菩薩行とを屬むといふことが、我等の第一の心得なのである

(了)

x x x x x

御希望の方は教發行所にて一割引の便宜あり

## 天風三萬里紀行 (其三)

文部省囑託 小林 日種

### 三、哈爾濱まで

四月十七日

午後二時から滿鐵地方事務所の大川氏の案内で露天堀その他を見物に出た。何にせよ、鑛區面積一千八百二十萬坪、主要炭層の厚さ平均百三十尺、最も厚き部分は四百二十尺に達し、埋藏量九億噸と推定せられる、世界に類例なき大規模のものだと云ふのだから驚かされる。露天堀の外に地底を掘つてゐるのもあつて、エレベーターで坑内に下りて見てはその事であつたが服裝をすつかり着替をねばならぬとの事に恐れをなして辞退した。

露天堀りには表土を剝離しつゝ、石炭の採掘を行ふ方法で、見渡す限りそれで、その中に蟻の蠢めくかと思ゆるのが皆職工で有るのに一驚した。その方法が

世界無比で有るのみならず。市街を移轉してその下を掘ると云ふのも珍らしいし、何十年か先きには又その市街をも移轉してその下を掘るのだと聞かされてはその無限の富にたゞ々々驚異するばかりであつた。

講演は午後七時半から滿鐵社員俱樂部で催された。余は「不景氣より脱却すべき策如何」の題下に約二時間餘語つた。宿所である撫順ホテルへ歸つてからは、高宮師と滿蒙に對する布教問題に就て深更迄、語り合ひ、得る所訓えられる點が甚だ多かつた。

多謝

四月十八日

早朝 高宮師の御迎を受け同師の布教所へ行つたところ、既に信徒が多數集まつて居られたので直ちに講演した、題は「開法と歡喜」と云ふのであ

つて成佛問題がその主なる内容であつた。二時間餘語つた後、一同記念の撮影を爲し、その儘信徒諸氏等多數に見送られて驛に行き出發した。

奉天に着いたのは午後一時であつた。驛には、花木即忠師井上藤次氏、東亞勸業の酒井氏及び滿鐵地方事務所の方々が出迎えてゐて下さつた。一先づ蓮華寺へ落着いた後、井上氏宅へ赴き、夕景迄、御馳走になつた。井上氏は岡松師の姫路時代からの知己で、聞き合ひ話し合つてみると、本宗に殊更らにゆかりの深い人であり、刻苦の末、只今では家運も隆盛で、前途と春秋に富む好箇の青年紳士であつた。

夜の講演は、日蓮主義誌友會の主催の元に蓮華寺で開かれた、日蓮宗蒙古特使、高鍋日統師が折柄、來奉中なので私と二人がすると云ふ事であつたが、結局、定刻迄に御見えがなかつたので、岡松師が代つて『日蓮主義の信條』に就いて語り、余は『身讀法華』の題下に晚く迄語つた。聴衆は滿堂で、靜肅且つ敬虔で語るに説くに非常なる愉快を覺えた。

四月十九日

朝、東亞勸業の酒井氏が見えられ、専務の吉植庄

話をするに際しては、殆ど相手の顔を正視せず、聲も甚だ低い、もつとも彼の母は趙氏でこれは貴族の出である。彼の父作霖が遼西馬賊の一頭目である董大虎の部下として茫々たる北滿の曠野を縦横無盡に馳騁して掠奪をほし、にしてゐた當時、或夜部下三十名を率ゐて、新民府の富豪趙家を襲つて前から眼を付けてゐた美しい娘を盗み出し、馬に乗せて連れ歸つて自ら妻にした。つまり掠奪結婚をした譯でこの妻の産んだ長男が學良氏なのだから、争はれないものでその父程に野獸性もなければ、強味もなく一見弱々しさを感ずるのが、一方奉天票の慘落と云ひ、舊軍閥の凋落と云ひ、奉天派の迫り行く運命がほゞ明瞭である今日、餘計身邊蕭條落莫の感を感じしめるのかも知れない。

此夜は滿鐵社員俱樂部で講演した。  
四月二十日

地方事務所の社會主事、河村氏の案内で、城内及び北陵の見物に出た、先づ城内吉順絲房に到り、最上高樓から四圍を俯瞰した。大城奉天をとりめぐらして一里半、高さ三丈の障壁の内も外も一はけ灰を塗

三氏が折柄、上京中なのでその代理として幹旋する旨を語られ、會社の自動車で領事館、陶尙銘邸、その他を案内して呉れた。且つ前日來よりの同氏の奔走によつて、此日午後一時から城内雅叙亭で、張學良氏に非公式に會見する手筈になつてゐたので、定刻、同氏に伴はれて赴いた。その時の事は東日に寄せた通信があるから、それを披萃して置こう。

『東三省總司令張學良氏に會見する事を得たのは専ら親日派の巨頭たる陶尙銘氏と、黃慕と名乗つて歸化してゐる日本人荒木五郎氏の幹旋によるものである。』

初め領事館側ではあまり、本人をおだて、は困ると云ふ理由で會見を喜ばないらしかつたが、兩君の熱心なる幹旋と、希望とに依つて、奉天城内、雅叙亭に於て非公式に會見する事を得た。

初めて學良氏の風手に接した予が意外の感に打たれた事は、彼の父が綠林の出であると云ふにも拘らず、彼は純然たる一個の青年紳士で、極めて腰の低い瘦身白哲の優さ男である。眼光も少しく炯々たる所があるがそれとて人を射るといふ程ではなく人と

つたる如き色彩の單調さ、唯、看る、建物の高低が此の單調を破りて古き文化の上にも刻々に盛られ行く新しき時勢の動きを示してゐるのみである。四顧すれば、儼然と繞る方形の城郭、その上に聳ゆる大東、小東、大南、小西の門樓も大きやかに城の固めを示し、十字路に立つ鐘樓、鼓樓の愛すべき形も古都にふさわしく、又、都心に華麗の甍を竝べた高殿の指さされるは清朝の榮華を語るそれと打ち領かれる。學良氏の住む大帥府、その側なる雅叙亭等は城壁の南寄り、大南門程に高く聳えて見え、その稍々かなた壁外に接して、小南關路のあたり、異様な二つの尖塔のそり立つのは天主教會堂、再び眸を放つて遠く四望すれば西北郊外の野に北陵の長い丘岡が綠に這ひ、兵工廠の煙突のあなたに喇嘛の東塔轉じて城南に南塔を見越して渾河の走るわたり、眼路もはるかな原野更に又、眼を轉ずれば護國寺塔が空にかつきりと浮んで、その果てに附屬地の連りが視野に入る。吉順絲房とは日本の三越を小規模にしたやうなもので、それを素見した後、社會救濟事業で有名な、同善堂へ行つた。これは光緒十四年に左忠莊

公の設立したもので。内を、貧民、醫務、孤苦、工  
 藝の四部に分ちてあり、私生兒の捨兒を受取る救生  
 所の窓や娼婦の通入したものを教養してゐる濟良所  
 や、乞食を收容してゐる棲流所等を支那に珍らしい  
 施設として之を觀た。

北陵は日本の日光廟と思へば、まあ、間違ひが  
 ない。或は日光廟の結構が之を模したのかも知れ  
 ない。太宗文皇帝の靈柩を葬るの地で、靈域の規模  
 壯大華麗、たゞ、眼を驚かすばかりである。河村  
 氏と共に記念の撮影を爲し歸途に就いた。

奉天高等女學校の講演は午後二時からあつた。矢  
 の走るは弓の力」と題して約一時間半語つた。此の  
 學校の生徒は近頃、修學旅行で内地へ行き異常な歡  
 迎を受けた事を、全校の生徒の感銘として我等に對  
 しても非常に良き親密の情を持つて對してゐた。體  
 格は概して内地の女學生に比して數等良いのを見受  
 けて頼もしく思はれた。

夜は井上君の案内で、公園俱樂部の鑛泉へ遊びに  
 行つた。  
 四月廿一日

奉天發午前九時の汽車で長春に向ふ。私は展望の  
 中から、追つて來るものゝない、非常な大きい廣さ  
 を感じさせられながら、目を凝らして窓の外の、ど  
 こ迄も、同じやうな單調な土と植物とに見入つて  
 ゐた。

「たしかに深い林は、こゝからは非常に遠いのだら  
 う」と思ひ乍ら、併し私は自分の目が全く人間の少  
 い境を通つて行くのに驚いてゐた。目に見えるもの  
 が妙に靜かで寂しい、賑さの影もない、そして全體  
 が一つの諧調、灰色をどだいにした諧調が晴れた空  
 の日光に向つて沈んだ銀の反對を見せてゐるのみで  
 ある。私の目はまっ平な灰色の海のやうな平野を見  
 るのにくたびれ乍ら北に、と運ばれて行つた。午  
 後六時、灰色の薄い闇が平野の地面から、次第々々  
 に湧き上つて來て、廣いはての方は暗さが漂ひ始  
 め、近い處のみは、いつ迄も妙に明るく、太陽は長  
 い間、西の空に留まつてゐて、纏て低くなつて緩や  
 かに沈んで行つた。それを合圖にしてゐるやうに、  
 瀧車は滑らかに長春の驛に走り行つて止まつた。  
 驛には谷口慈祥、吉岡行辨の二師並びに、仁保慰

貫氏その他の人達のお顔が見えた。

長春の風は冷たく、頬を刺すやうであつたから急  
 いで毛皮の襟を立て、襟巻で咽喉を覆ふた。此のあ  
 たりには自動車と云ふものは一つも見えない。カラ  
 ンと陰惨なベルの音を立て、アスファルトの道  
 を、カッ、と馬車の軋り行くのも淋しい。經王寺  
 は街のはずれにあつて、金光教の教會の宏壯な建築  
 に壓せられたやうな形で立つてゐた。撫順でもそう  
 だつたが、金光教はなか、發展してゐる。静くと  
 もその外觀だけは、然し天理教はその比ではない。  
 遙かに蹴落されてゐるやうに見えた。

經王寺でもおもてなしを受け、充分、疲れを休めて  
 から、例の馬車で又、停車場へ行き、午後十一時四  
 十分發のハルピン行に乗り込んだ。

歐亞連絡の國際列車だけにちよいと氣取つた威嚴  
 と壯重のうちに、間もなくその車輪は廻轉を開始し  
 た。

多くの出發と別離がさうであるやうに、じうつと  
 劇的な瞬間が感ぜられた。いよ、日本の勢力圈内  
 を離れたのだと云ふ民族的な感傷が腦髓を侵蝕して

來た、それは私の少しも豫期しなかつた、そしてそれ  
 だけまた自然すぎる、莫然たる憂鬱だつた。私は白  
 つばい不安に捉はれながら、飴いろの美しい車室の  
 寢台に靜かに仰臥した。

誌料領收

自七月廿一日(振替は少ななくも兩三日の遅)  
 至八月廿一日(延有之候に付御金要下度)

金六圓也	札	本	澤	隆	正	殿
金五圓四拾錢也	西	日	市	田	久	保
金九圓也	神	戸	熊	井	本	光
金壹圓五拾錢也	青	森	柏	本	吾	市
金貳拾壹錢也	金	澤	本	郷	常	次
金壹圓貳拾錢也	東	京	府	聖	成	光
金貳圓貳拾錢也	高	岡	林	長	吉	殿
金貳圓貳拾錢也	大	阪	府	澤	田	萬
金五圓也	釜	山	林	山	正	殿
金六拾八圓也	京	都	有	田	宏	道
金壹圓貳拾錢也	大	阪	府	長	井	喜
金貳圓五拾錢也	久	留	米	中	原	通
金六拾貳錢	鳥	取	米	田	砂	殿
金壹圓四拾錢也	東	京	府	春	日	金
金貳圓貳拾錢也	高	岡	横	山	友	次
金貳圓貳拾錢也	横	濱	小	高	清	殿

右難有入張仕候

「統一」會計

# 記事

## ホノル、の野口上人

(第一信)六月三十日着

昭和四年六月二十一日横濱埠頭を出帆されてから初めての通信(六月卅日付)ホノルルから

タクヒ ツイタ コーカイホーエツ ケンコーヲ

イノル ノグチ(無線電信)

(第二信)七月廿七日着

謹白 横濱埠頭各位と別れ候てより感慨無量沈思默想馳に達し候 二、三日は一人の知人も無之 終日誦經讀書に過し、四日目頃より船長機關長と懇意になり依頼に應じ揮毫いたし候隨て他の人々とも昵懇になり清談法話に暮し揮毫も致し候 七、八日目には一等講堂にて講演會も開き、天氣晴朗浪靜に十日目に布哇ホノルル港に着し候 出迎男女多く花輪を頭に五ツ六ツかけ被下顔も埋まる計りにて気分よろしく願はしき風習と思はれ候 布哇は突然の上陸故從是プログラムを作り夫々宣布に動むる豫定に候 何分萬事不得手の私故カバン一ツ開くにも他人の手を借りる様の有様に候 御察可被下候 御懇察被下候折々書狀差上候筈に候へ共無音勝に可相成御

諒承願上候皆々様の御健勝奉祈候

ホノル、にて

日 主 拜

後授會各位坐下

以一味雨 潤於人華

此書狀認候時も來訪者數人談話中執筆亂雜失禮

「布哇報知新聞外三種の邦文新聞及びホノル、アドベータイザ紙(七月十日)は野口上人を紹介し 更に周囲の人々に依りて企劃せられたプログラムを報道したる記事等は紙面の都合にて掲載され難きを遺憾とす、」

(第三信)八月二日着

各位彌御清移奉大賀候、本尊顯揚日本佛教を白人に紹介するには世界大戦々死法要にて集之、同胞慰問は布哇開島已來同胞の當島に淋しく死逝せしものを祭るを第一としてホノル、市 ワキキ、公園に一大祭壇を設け追弔法要を嚴修せり、頗る盛會外人にて研究を申出るもの招待を申出るもの數人(狀況は別紙新聞にて御察し可被下候)去る十二日には世界的運動バハイ教に招かれ「日蓮主義と世界平和」の題下に講演致し候明十八日は白人美術館にて「佛教と美術」の講演及揮毫會を催し、東洋文化を一分見せる積りに候これも白人主催に候(是又歐文新聞御覽下さるべく候)廿二日は白人汎太平洋會に招かれ「日蓮教と世界文化」の題にて話する事に候 白人(當

地の人西洋人を白人と云へり故に云)は東洋の宗教及文化を學度傾向に見受候小納は短日月故甚の一目を置き歩くに過ぎ

ず二陣三陣と續きて日本宗教日本文化を傳ふるの急務なるを感候

布哇は八島より成り二十ヶ八國の人類にて繁華を競へり氣候溫暖四時花不絶否滿開地上の極樂境なり吾等の目よりはヨチ過ると思ふ、活信仰なければ末終に危しと思ふ、導師の必用茲にもあるなり、布哇は太平洋面の眼晴、東洋文化の接觸地頗る興味地なり來る十八日には練習艦隊を此地に迎ふ小納乗るべくして乗らざる艦を幾千哩外に迎ふ世の中は面白きものなり、小生は此次の船にて桑港に渡候御無音勝申譯無之候へ共朝は早朝より夜は一時二時迄法話清談及び揮毫、書狀を認む暇少く御諒知可被下候先は寸音迄草々

祈各位の健康候  
南無妙法蓮華經

ホノル、にて

日 主 拜

饒別會各位

(七月十五日布哇報知新聞記事)

「世界大戦々死者及同胞先亡者追悼法要の大成功、西洋婦人多數燒香」と云ふ見出しで當日の祭壇を中心とした稚子行列の大版寫眞を掲げ、ウイリソン布哇市長の追悼辭、と記して

野口日主師も大満足、と報じてゐる。(以下略)

七月十三日土曜日

(ホノル、)、スタブレウテイン紙同師を紹介して中央上段に七條燕尾姿の師の寫眞を掲げ其の下段に左の紹介文が掲載されて居ります。

日本に於ける佛教界の傑れたる指導者にして在東京日蓮教寺院の住職たる野口日主權大僧正は世界巡錫の途次ホノル、に寄港された。日主師は日本書道作振會の發起人ならびに指導者の一人である。

來る七月十八日午後七時半よりホノル、美術院に於て二尺の巨筆を振つて書道の實際を示される。書道は支那アラビヤ及び日本に於ける藝術及修養法の最古のものの一にして美術發達史上傑出して居る。日本の書と日本畫との間には密接なる關係が存在し——日本人の眼は筆のあたりの中に表現の世界を越えて人間の心に迫り來る非常に微妙なる美を見出し得ると云はれて居る 此實演はホノル、にある是の舊き藝術の境地に興味を持てる人々に取つてまたなき好機である。而して興味は更に師が日本外に居住せる人々に見せる爲に携行せられたる宮中の儀式に用ふる色彩華やかなる法衣姿で出場せられる事に依つて彌増すであらう。

(第四信)八月三日着

布哇を七月二十七日に出發された同師より去八月三日無事

北米桑港に到着の極き無線電信がありました  
イマツイタ カクイノケンコーライノル ニチシユ  
日主上人の北米合家國滞在期間は一ヶ月の豫定であります

が、向後益同上人の御壯健と充分なる御活動を祈り且つ希望  
致します。

### 報 教

#### 神 戸 教 報

△六月廿七日午後七時より 修法後  
釋迦出生當時ニ於ケル印度ノ社會狀態  
日暮光道氏  
魚ノ子ハ多ケレドモ魚トナルハ少シ  
熊井本光師  
△七月七日日ノ本子供會開儀(午後一時より)  
中尾先生  
ランタヤンノ櫻轉 日暮先生  
クロクツタン 日暮先生  
ジエミールノ爲メニ 同 先生  
△七月十四日(日曜)午前七時より 修法後  
熊井本光師  
主師親の三徳 熊井本光師  
會今後毎日曜毎ニ朝七時ヨリ法華經研究ニ志

X  
X  
X  
X  
X  
X

ス人々ノ希望ニテ修法後法華經要義ノ講話會  
ヲ開ク 講師ハ熊井本光師  
七月十四日午前十時ヨリ立正寺ニテはちす經  
人會ノ大會ヲ開キ本山部長ノ御來詞ヲ得テ修  
法後 住みよき世界の建設 本山部長 川崎  
英照師講演後橋流筑前聖德 由井か濱風 法  
塔山西川旭梅嬢 聽衆悉ク涙ヲ催シ報恩ノ念  
愈々切ナリ。  
△七月廿一日 日曜例會 朝七時ヨリ 修法後  
遺文講義 熊井本光師  
△廿八日 日曜例會 朝七時ヨリ 修法後  
遺文講義 熊井本光師  
八月四日 午前七時ヨリ 日曜例會 修法後  
遺文講義 熊井本光師  
同十一日 午前七時ヨリ 日曜例會 修法後  
宗教ト道徳トノ原則 熊井本光師

第一期研究ヲ終リタル法華經研究會ハ來ル十  
月ヨリ第二期研究ヲ始ム。

#### 福 島 教 信

七月二十三日夜  
郡山市中町二本松銀行郡山支店ニテ  
如説修行抄要義 (一) 中島元道師  
佛數貫串之主張 (二) 三谷會善師  
大乘 愚 潮 (三) 武田顯龍師



目 次

震災の教訓と佛教……………	本多日生
佛の御心と我等の信仰……………	本多日生
天風三萬里紀行(其四)……………	小林日種
記 事……………	………
○北米の野口上人、	○各地教報

第三十四年十月號

東京市芝区新町三丁目八十二番地  
 編輯者 磯部滿孝  
 發行人 磯部滿孝  
 印刷所 都 印刷所  
 電話號碼六〇〇四番  
 東京市芝区新町三丁目八十二番地  
 發行所 統一發行所